

山梨県立大学 2018年度 観光講座

歴史科学的に 山梨をひも解く

山梨県立大学地域研究交流センター

目 次

講演会と観察会のいきさつ	・ 輿水達司	1
------------------------	--------	---

講演内容

縄文時代とは何か～日本列島における山梨の縄文文化～	岡村道雄（元文化庁主任調査官）	3
山梨の古代文化を石から探る	保坂康夫（山梨県考古学協会）	9
日本列島形成史から山梨県内の扇状地形を読み解く	輿水達司（山梨県立大学）	15
ヒトと自然が作り出した山梨県の昆虫相	小粥隆弘（オオムラサキセンター）	23
広重の歩いた身延道～甲府城下から富士川方面へ～	新津 健（山梨県考古学協会）	31
写真で読み解く半世紀前の山梨	中澤京子・小澤千寿子（NPO 地域資料デジタル化研究会）	39
柳沢吉保と甲府城～城内に新設された能舞台の姿とは～	西海真紀（甲府城研究会）	51
富士山の環境とその変化	仁田晃司（環境省富士五湖自然保護官）	65
現地視察（北杜市ひまわり公園周辺～昇仙峡周辺）	輿水達司・新津 健	71

講演会と観察会のいきさつ

山梨県立大学特任教授 興 水 達 司

山梨県立大学では地域研究交流センターが主体になって、平成30年度の観光講座として「歴史科学的に山梨をひも解く」をテーマに掲げ、講演会と観察会を企画・実施しました。その際の講演要旨を中心に記録として、このたび報告書にまとめることができ、関係の皆様には心から御礼申し上げます。この講演会・観察会を企画した立場から、その背景と経緯を以下に簡単に述べてご挨拶とします。

平成30年（2018年）は、夏場を中心に度重なる豪雨や台風が日本列島を襲来し、この観光講座も、当初の計画を進める中で一部の日程については変更をしようか、実は事務局と何度か実施日の直前に悩みました。結果的には、当初の計画通り無事に終了できましたが、この平成30年の夏場は上述しましたように、豪雨や猛暑が繰り返す厳しく異常な気象でした。その反動・影響として、この報告書を取りまとめている現在の立春以降には、今度は10数年ぶりの花粉の大量飛散ということで、花粉症の者には悩ましい状況になっています。これもまた、昨夏の気象状況を考慮すれば、自然界の仕組みとしては当然の成り行き、ということかも知れません。

さて、この観光講座では基本的には山梨県内の観光振興を大きな目標に掲げ、その基礎をなす資料や情報の提供を強く意識した企画を進めてきました。具体的には、この企画を開始して以来、現在までの間、自然や人文分野における専門家による、山梨の話題を中心に、県民に幅広い情報提供をしようと志し、山梨県内の各地をターゲットにしてきました。

本年度も、この方向性の中で、自然並びに人文分野のいずれにおいても、山梨県内において第一級品が豊富に存在していることを県民に広く再認識してもらえよう、歴史科学的な視点も加味して、関係者の協力を頂きながら話題提供に努めました。この中には、本年度（平成30年5月）に八ヶ岳を中心とした縄文文化が、「日本遺産 星降る中部高地の縄文世界—数千年を遡る黒曜石鉱山と縄文人に会う旅—」として認定されたこともあって、第1回目の7月29日に、縄文文化の分野で活躍されてきている、お二人（岡村氏・保坂氏）にトップバッターとして登壇していただきました。すなわち、日本列島における山梨の縄文文化の位置づけから始まり、縄文時代当時の文化的水準が随分と高く、現在の我々の身近な生活・文化にも通じる点などが紹介されました。この前半の講演を受けて、さらに後半では当時の日常生活における必需品としてのみならず高い芸術性の面からも、考古学分野でその実態の解明が進んできている、当時の黒曜石を題材にされ、ご自身の研究を随所に織り交ぜながらの話題提供がなされました。これに続いて、第2回目の9月2日、第3回目の9月30日、第3回目の10月14日には、それぞれ山梨県内の自然並びに人文系の分野から、興味ある話題の提供を頂きました。

そして、第5回目の10月28日には、山梨県立大学の観光講座としては初めての試みとなる、バスをチャーターしての現地視察となりました。この現地視察の経緯としましては、以前からこの観光講座に参加された方々のアンケートに記されてきた、座学の話だけでなく、実際の現場に出かけて専門家による説明を受けたい、との希望を実現したものです。この希望を踏まえ、今回のバスの案内役には、この講座の基本方針となる「人文系と自然系の融合」という趣旨にそって、人文系の案内者には新津氏が、また自然系の案内者には奥水が当たりました。観察会当日は以下のように、午前中の概要は、甲府市内を出発し北杜市のひまわり公園付近においてパノラマ景観の中で、南アルプスや八ヶ岳などの大地形成史を一千万年スケールで理解をはかり、その上でこの高原地域にかつて繁栄した縄文文化については、新津氏による人文分野からの大局的な解説の上に、さらに現地の”縄文記念公園“における担当の専門家からも懇切な説明を受けることができました。その後、道の駅「韮崎」で昼食を済ませた午後には、昇仙峡地域に場所を移し火砕流や御影石などの活動史を理解しつつ、さらにこの地に特有な山岳信仰を始めとする歴史・文化変遷にも幅広い説明がなされました。この後、県立大学に戻ったわけですが、この観察会がバスによる移動ということもあって、バスの中では参加者と案内人の我々との間で、相互に質疑等のやりとりもフランクになされ、時に人文系の話題に自然系の補足などもありました。このように、現地の観察時のみならず、移動の中においても分野横断的に話題が深まる場面もあって、実りのある観察会となったと自負しております。

以上のように、平成30年度に山梨県立大学が企画した観光講座には、従来の座学としての講演会を4回と、これに加えて最後の5回目にはバスをチャーターしての野外観察会という組み立てで実施できました。この一連の講座には、県民の多くの参加がありました。各々の講演・観察会の際には、参加者から活発な質疑も交わされ盛大なものになりました。企画者として、以上の関係の皆様にご心から御礼を申し上げ、ご挨拶とします。

日本列島における山梨(ハヶ岳山麓と甲府盆地)の縄文文化

元文化庁主任文化財調査官 岡村道雄

一、東北アジア史の中の縄文文化

新石器時代は、長く続いた旧石器時代の遊動生活から、後氷期の温暖化によって成立した多様な生態系に適応し、土器、石斧、釣り針などの道具を持つ定住生活を始めた時代である。その後に金属器を持ち、農耕・牧畜などを主たる生業とするまでの時代である。

東北アジアには米を主とする農耕文化圏、アワ・コウリャンなどを主とする農耕文化圏、自然物利用を主とする文化圏がある。自然物利用の文化は、日本列島、中国東北部・モンゴル、ロシア沿海地方やサハリン以北に分布し、自然の恵みを得ることに由来するアミニズムが支配的である。そこでは狩り・漁労・採集・土木などでの協業と分配、相互扶助、譲与や祭り、物流や人々の交流によって定住が支えられ村落共同体が発達した。

縄文文化は、温帯モンスーンに含まれ季節性をもつ多様な豊かな生態系を基盤に日本列島で花開いた固有の新石器文化である。把手や波状口縁などをもつ形や、縄文や隆線・沈線などの装飾（祭祀）性豊かな文様を持つ縄文土器、石鏃・石匙(携帯石ナイフ)、土偶・石棒などの祭祀具をもつなどの特徴によって縄文文化圏を形成している。

二、縄文文化とその 1.3 万年間の時代の時間と地理的な枠組み(図 1、岡村 2018)

1. 時間的な枠組み

①縄文文化は、前述した特徴(文化的要素)の広がりから認められる鹿児島県から北海道までの範囲が、その文化圏と見られる。沖縄は、南から約三万年前にこの地域に到達した祖先が、新石器時代になっても縄文文化がもつ固有な特徴をもたず、またこの地の文化が本州にほとんど到達していないことから見て、独立した文化圏を形成していたと考えられる。沖縄としての固有な文化を基本的に今日まで継承した。

一方、縄文文化も日本列島に北は、北海道北半、北海道南半から北東北、南東北、関東・甲信越(便宜上、中日本と呼ぶ)、東海・北陸、近畿・中四国、九州北半、南九州の八か所の地域文化圏が分立し、土器や土偶・祭祀具・装身具や、祭祀場の型式、葬送や送り儀礼の特徴とその広がりによって各地の地域文化のまとめ、地域文化圏が設定できる。

この日本列島に分立する沖縄文化圏も含めた地域文化圏は、東北アジアに並行して点在する新石器時代の地域文化圏と同等の文化的まとまりをもち、各々は信仰、価値観、習慣、世界観などと、それらを伝える言語を共有する同族意識に繋がれた民族・部族が支えていたと考えられる。各地域文化圏は、三万年前の前後に主に北方の北海道半島と、朝鮮半島経由で本州島に渡来した私たちの祖先が、先述したおよそ八地域で形成された。つまり岩宿文化と呼んでもいいような日本固有の旧石器時代文化と、その地域性(地域文化圏)を形成し、約一万五千年前から七千年前までの急激な温暖化(縄文海進)に適応して縄文時代へと地域文化を継承し、約 1.3 万年間の日本列島の環境に適応した循環・持続型の縄文文化の時空的枠組みの基礎を築いた。

②重層する文化圏と歴史は、研究と説明のための便宜によって学問的に区分されるものである。したがって文化圏は、その指標とその広がり、範囲や鮮明度・固有性の強さによって捉えられる。東日本では一般的に、先ず川沿い、湖沼・内湾・盆地周辺などに分布する径数キロ範囲の遺跡群があり、それは拠点集落・本村と枝村やキャンプサイトなどによって構成される最小の地域社会・集団を示す。次に川筋、山麓などのより広い地域に分布する複数の遺跡群によって支えられた。そして土器・土偶型式などで括れる地域文化圏へと重層している。これらはそれぞれ、婚姻・交流・集団移動などによる流動的な統合・分立、文化の相互作用もあったようだ。また文化圏の範囲の移動、拡大・縮小などの変動もあり、複雑に変遷している。文化の固有性・特徴を示す有効な指標を設定して、実証的に重層する文化圏とその移動・変遷を歴史的に捉える作業・研究を進めなければならない。さらに、地質・地理とそこでの生態系を反映すると考えられる東西日本の二大別、そして総括的な縄文文化圏へと重層する。

2. 時間的な枠組み

前述のように重層し、そして並行して変遷する縄文文化・歴史を、学問的区分として時代・時期区分してきた。さらに縄文時代の場合は、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期をおよそ土器型式の数をもって便宜的に分け、さらに各期を前葉、中葉、後葉に三細分、あるいは前後に二分して説明してきた。そして最も短い時期単位は、一緒に出土する土器の型式・細分型式(暦年代で短い場合でも20～30年間)で示される。これは土器型式期として、土器型式編年表に示される。

しかし、本来文化は、歴史・変遷を段階的に捉えて区分して説明するのが適切であろう。自然環境への精神的な適応と技術的な工夫による、定住の安定・変遷をもって時期区分する必要がある。また各地域文化圏や、東と西の大きな違いを認識して、それぞれの文化圏の歴史を地域史として研究しなければならない。例えば、早期の押型文・捺糸文以前の時期を定住化が始まった黎明期、早期後葉から前期半ばまでを定住成立期、中期後半と終末の崩壊までの隆盛期、後期から晩期半ばまでの成熟期、北九州から関東・甲信越までの晩期半ばから米作りが始まるまでを衰退期と仮に設定しておきたい。なお北陸北部・東北から北海道までは、本格的な米作り・農耕は、古代まで段階的に導入されており、そこでは縄文的生活と社会は継続したことを付言しておきたい。

三、山梨県の特に八ヶ岳山麓と甲府盆地の地域文化圏の特徴

山梨県は、東日本の縄文文化圏内にあり、それを構成する関東・甲信越からなる「中日本」地域文化圏に含まれる。この地域文化圏は、東日本が隆盛期を迎えた中期後半には【東関東(千葉)・東京・神奈川の東側】と【北関東】の加曽利E文化圏、【西神奈川・甲府盆地・八ヶ岳山麓】の曾利文化圏という細分地域圏をもつと推定される(図2、小林編2008)。後者はさらに西神奈川、甲府盆地・八ヶ岳山麓のそれぞれで、地域性が鮮明になる文化要素・特徴をもつようだ。これら地域文化圏の範囲、その設定、地域区分は、今後、実証的な作業を踏まえて慎重に検討しなければならない。

ここでは仮に八ヶ岳山麓と甲府盆地(中部高地)について、中期後半の文化的なまとめ、特徴について、仮説を述べておきたい。

① 高度な植物利用と栽培化の始まり

この地域では、高度な植物利用やクリ・豆類(ツルマメ・ヤブツルアズキ)などの育成・管理(栽培化)の実

態が、にわかに明らかになっている。

土器内面に炭化して付着したツルボやノビル、「パン状炭化物」、クリ・クルミなどの堅果類がやや目立って出土する。また、住居床などから見つかるエゴマや豆類の炭化種実類、それらを胎土に練り込んだ祭祀用「圧痕土器」などがあげられる。合わせてこの地域に多い打製石斧、大型石匙、石皿・磨石・敲石などと、逆に石鏃などの狩猟具が少ない実態は、この地域での植物食文化の発達を示しているとみられる。今後は、栽培化の実態、耕作地の有無、植物利用のための道具農具などについての解明を期待したい。

② 集落内外のインフラ整備、物流と人々の交流に支えられた長期継続型の定住集落

集落内外のインフラを整備し、長期継続型の環状拠点集落を営んだ(図 3、北杜市教育委員会 2006)。堅穴建物と掘立柱建物、墓地、貯蔵穴、捨て場・送り場、水場遺構、道も整備されていたことが明らかになってきた。

③ 特産品やその製造・精製・生産・流通などと人々の交流による定住の補完

黒曜石の採掘と保管・加工が行われ、ヒスイとコハクや石斧など共にその流通が行われ、それらの利用も進んだ。また、そのルートを活かした塩干・魚貝や海藻などの流通も想定され、拠点集落は集積、物流拠点にもなっていたと思われる。

④ 東日本では中期後半に人口のピークを迎え、特に中日本と北東北は安定した定住と人口増加

八ヶ岳山麓と甲府盆地を中心とした曽利の地域文化圏でも環状集落が発達し、山梨県では中期後半の曽利式土器期に堅穴住居数が突出した(図 4、大阪府立弥生文化博物館 2012)。

⑤ 循環・再生の精神文化や祭りの発達、シャーマンの登場

採集・狩猟などの生業、土木作業などでの協業には、リーダーが不可欠だと考えられる。また墓に耳飾りや櫛を着けた人や、ヒスイやコハクなどの大珠を佩びた人が埋葬されており、その人たちは祭りや祈りを司ったシャーマンだったと考えられる。また日常生活でも、男と女や年齢階層による分業がはかられていたとみられる。つまり、身分の上下でない階層が、大きな定住集落・集団生活において、誕生していたと思われる証拠がいくつか見られる。

人の埋葬、祖霊祭祀、家送り(焼却堅穴建物、廃屋儀礼)・もの送りなど葬送を中心とした祭祀と祭祀道具などには、民族・部族に固有な精神生活・祭祀の発達がみられる。特にこの地域の中期後半の文化圏では、日常生活の上でも「石柱・石壇をもつ」堅穴住居や祭祀性が顕著な曽利式土器や彫刻石皿などがあり、日常的な祭祀性がうかがえる。またこの地域文化圏では、曽利土偶(図 5、新津健 1998)、誕生土器・有孔罌付土器・釣手土器、人体文や蛇体文土器などの独特な土器、石棒と誕生土器の合体祭祀、廃屋儀礼など個性の強い祭祀が発達した。同族意識を固め、他者や悪霊・災いを忌避するための強い精神的・祭祀的文化だったと言える。引き続き後期には、荘厳に石を組んだ祭壇や墓地などが、特徴となる。同じく石を多用した北東北・道南の環状列石と並んで、祭祀文化が発達した。また特に鳥獣類の骨や堅果類を、焼いて送る祭祀も発達した。

四、まとめ

東日本の各地では、祖先が、その地の固有で豊かな風土に適した生活文化、技と心を発達させてい

たことが、全国各地での発掘調査によって急速に明らかになってきた。大昔の先史時代・石器時代の歴史は、原始的で遅れていたという偏見は次々に改められている。高度な自然物利用と共生などの文化を一万年以上かけて醸成し、日本文化の基礎を作った。世界に誇れる文化を祖先たちが築いていたことが明らかになってきた。

今ここで甲府盆地・八ヶ岳山麓での環境・風土に適合して発達した地域文化のように、その地域に根差した文化の良い点に学び、激変した現在の環境・自然への柔軟な適応を考慮した上で、縄文ユートピアモデルを構築し、現代ますます顕著になっている諸矛盾・諸問題を少しでも改善して持続的循環型の生活文化を再構築する必要がある。

最後になりましたが、本文を書くにあたり、佐野隆・長沢宏昌・新津健・保坂康夫の諸氏から貴重な助言をいただきました。

参考・引用文献

大阪府立弥生文化博物館 2012『平成 24 年度秋季特別展 縄文の世界像 -八ヶ岳山麓の恵み-』大阪府立弥生文化博物館図録 48

岡村道雄 2018「第二章 列島、西と東 -各地域の文化圏」『縄文の列島文化』山川出版

小林達雄編 2008『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

新津健 1998「曾利土偶の発生と展開」『土偶研究の新地平「土偶とその情報」研究論集(2)』勉成社

北杜市教育委員会 2006『山梨県北杜市 梅之木遺跡Ⅴ』北杜市埋蔵文化財調査報告書第 12 集

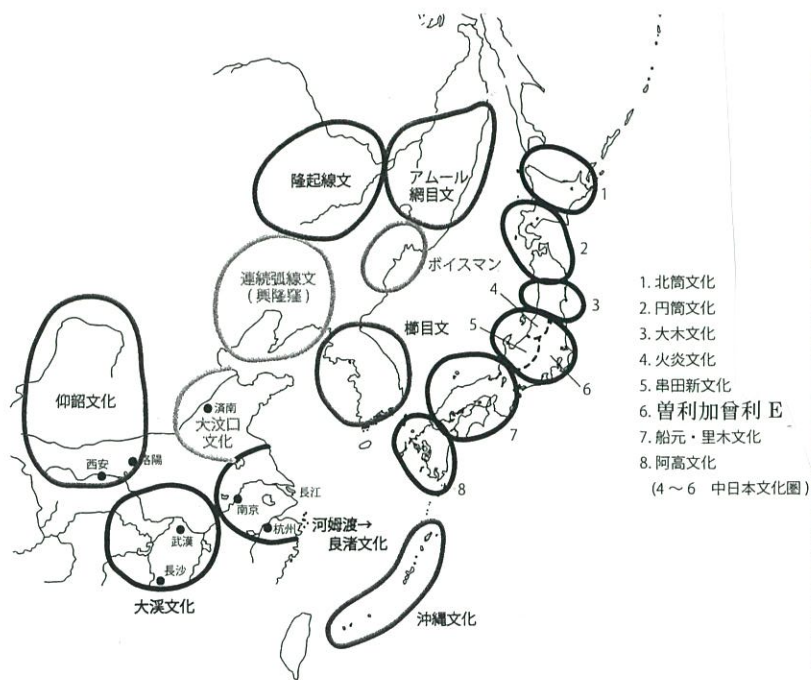


図1 縄文時代中期の東北アジア新石器時代地域文化圏の分布



図3 環状集落 (山梨県北杜市梅之木遺跡)

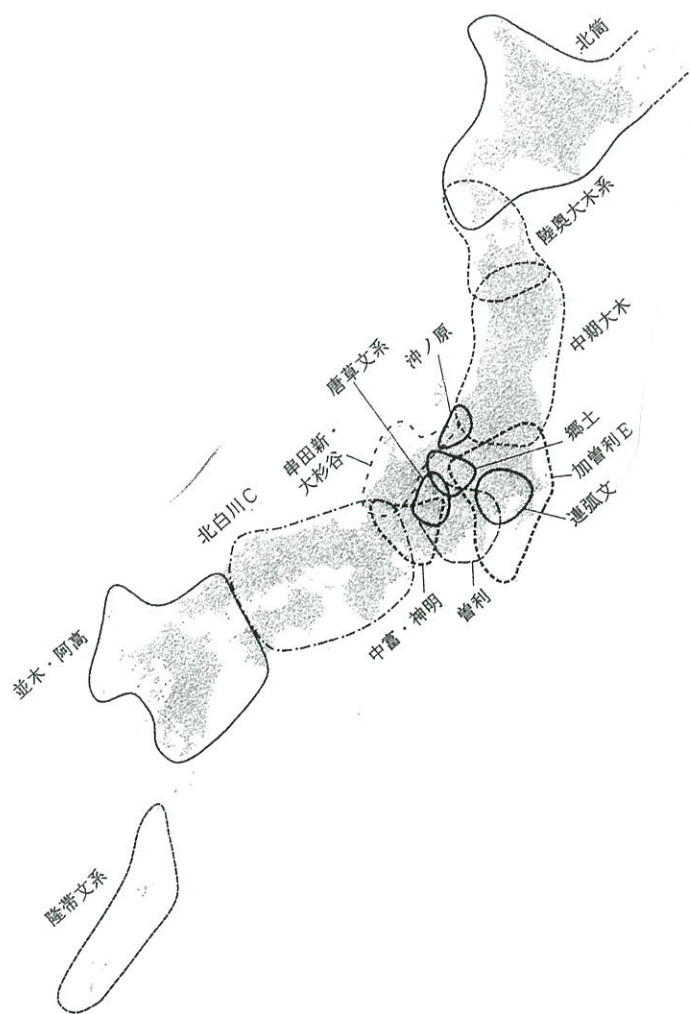


図2 縄文時代中期後半の地域文化圏

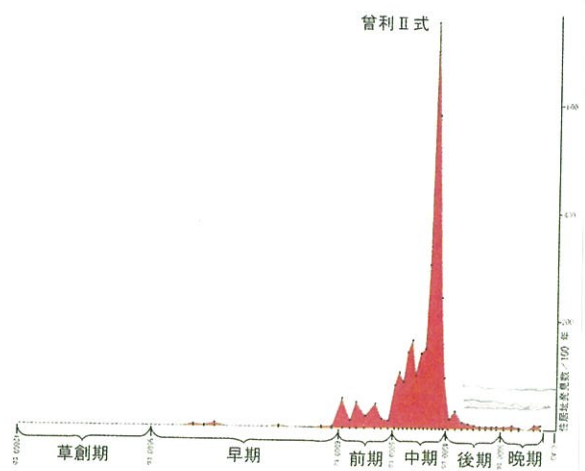


図4 中部高地における竪穴住居跡数の変遷

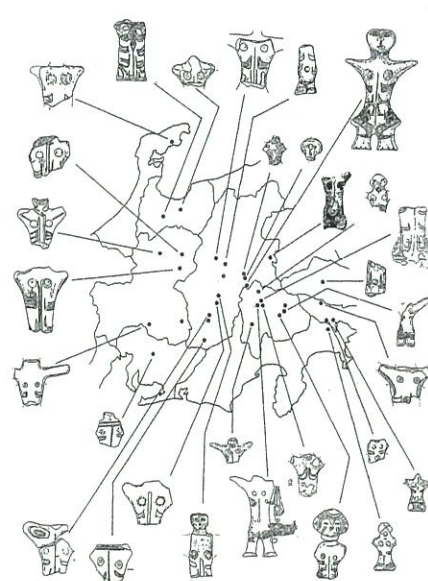


図5 曾利式土偶のひろがり

山梨の古代文化を石から探る

山梨県考古学協会 保坂康夫

1. 石の道具の歴史

現在の研究では、人間の歴史は 700 万年におよぶとされている。そのなかで、考古学的に遺跡から発掘される人間文化の最古の産物は石器であり、現状では 250 万年前とされている。

翻って、現在社会の中でも、石の道具は使われ続けている。砥石は最も多く目にする「現代石器」であり、実に 3 万数千年もの間、使われ続けてきた。他にも硯、石臼と、意外とさまざまな石製の道具の存在に気づかされる（図 2）。しかし、石が道具の素材として多用された時代は、稲作農耕社会である弥生時代の中期頃までの 2 千年前頃までで、その後、鉄をはじめとする金属が道具素材として石に取って代わっていった。

山梨では、3 万数千年前の遺跡を最古とするが、槍先とした台形様石器、木の伐採や動物解体に使われたとされる局部磨製石斧、切ったり削ったりする道具である削器などの石器が出土している。また、2 万年前頃の槍先であるナイフ形石器や、皮なめしに使う搔器、骨や角を削る彫器といった石器も出土している（図 1）。

石製の槍先を投げたりして狩猟し、狩猟地をめぐる遊動生活をしていた旧石器時代から、16000 年前頃に土器が出現し、植物性の食物に依存して定住生活を営むようになった縄文時代に移行する。石鏃をつけた弓矢による狩猟で、シカ・イノシシなどを狩り、ドングル類などを石皿・くぼみ石で潰し、土器であく抜きをし、煮炊きして調理する。石を打撃して細かく剥離して形を整えた打製石斧を土掘りの道具とし、石の表面を叩き潰すように敲打（こうだ）して形を整えて全体を磨いて作った磨製石斧で木を切り倒したり木器を加工した。さらに、信仰の対象とされた男根形の石棒などの精神的な道具がある（図 1）。

弥生時代では、その前半期は、山梨を含む東日本では、集落ばかりか住居址さえあまり確認されておらず、石鏃や打製石斧に似た石鍬（いしぐわ）、さらには礫器なども使われていた。後期（2 世紀頃）になると、イネの穂摘み具である磨製石包丁や石鍬がみられるが、石器の出土量が極端に少なくなり、一方で砥石が見られるようになることから、鉄器の普及が想定されている（図 2）。

2. 多様な石器石材とその意義

石器に用いる石材はとても多様である。日本列島の旧石器時代は最新研究では 38000 年前が現状では最古年代で、故郷のアフリカ大陸を出て東アジアへと拡散してきた現生人類が、この頃に日本列島に到達したと考えられている。この時からすでに、黒曜石などの後世に多用される石材が発見され使用されている。

八ヶ岳南麓の横針前久保遺跡（3 万数千年前）では、黒曜石、水晶、泥岩、珪質頁岩といった、敲くと鋭利な刃を持つ剥片が取れるガラス質の石材が使われている。清里にある丘の公園第 2 遺跡（約 2 万年前）では、黒曜石、珪質頁岩、泥岩、碧玉（へきぎょく）、流紋岩、安山岩などの多様な石器石材が使用されており、それぞれの石材産地をめぐりながらの遊動生活が復元されている。

山梨の縄文時代では、石器の石材は石器の種類によって大きく異なっている。打製石器は、黒曜石、珪質頁岩、泥岩、チャートといったガラス質の石材が多用される。なかでも

Figure 1: Illustrations of various stone tools from the 2nd layer of the Higashi Park site. The figure is divided into two main sections by a vertical dashed line. The left section shows various types of flint tools including arrowheads, spearheads, and knives, with labels such as '小形基部加工石器' (Small base-worked stone tool), 'ベン先形台形石器' (Bent tip shaped stone tool), '台形石器' (Trapezoidal stone tool), '小形微細加工石器' (Small finely worked stone tool), '基部加工石器' (Base-worked stone tool), '局部磨製石斧' (Locally polished stone axe), '横針' (Horizontal needle), '錐形石器' (Conical stone tool), and '二側縁加工ナイフ形石器' (Double-edged worked knife-shaped stone tool). The right section shows larger tools including '一側縁加工' (Single-edged worked), '基部加工' (Base-worked), '部分加工' (Partially worked), '彫器' (Carved tool), '搔器' (Scraper), and '削器' (Scraper). At the bottom, a caption reads '丘の公園第2遺跡 (推定20,000~18,000年前)' (Higashi Park 2nd site (estimated 20,000~18,000 years ago)).

有舌尖頭器

鎌形石器

石錐

掻器

楯先形尖頭器

神取遺跡 (推定11,000年前)

石錐

掻器

楯形石器

局部磨製石斧

石錐

掻器

砥石

磨石

凹石

石器全体のスケール

2cm

石鏃

横型 石匙

縦型 石匙

石錐

横刃形石器

石製裝飾品

研磨面

磨製石斧

打製石斧

敲打・スリ面

自然面

敲打面

石皿

石棒

礫器

クボミ痕

自然面

スリ面

クボミ石

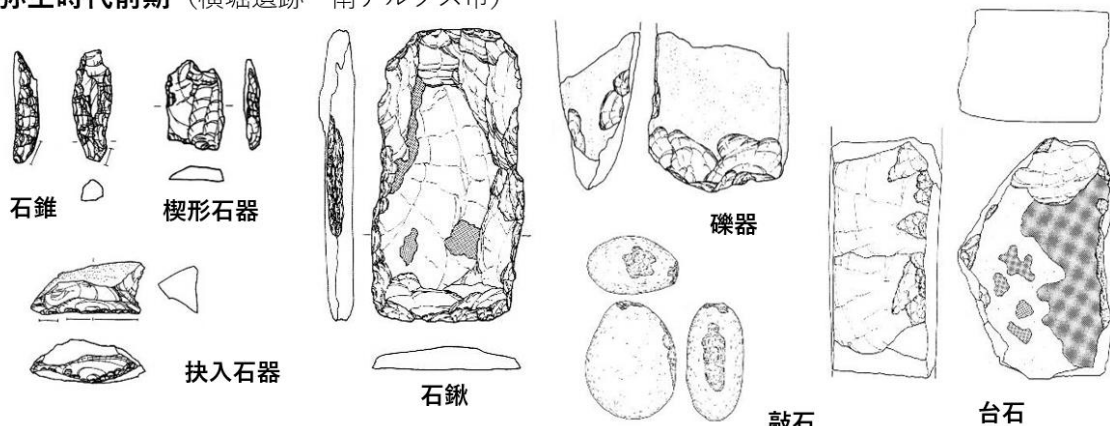
スリ面

クボミ痕

クボミ石

10

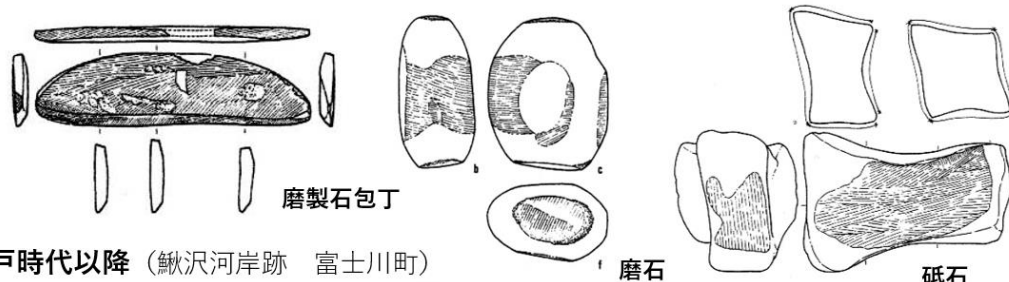
弥生時代前期 (横堀遺跡 南アルプス市)



弥生時代中期 (油田遺跡 南アルプス市)



弥生時代後期 (平野遺跡 富士川町)



江戸時代以降 (鯉沢河岸跡 富士川町)

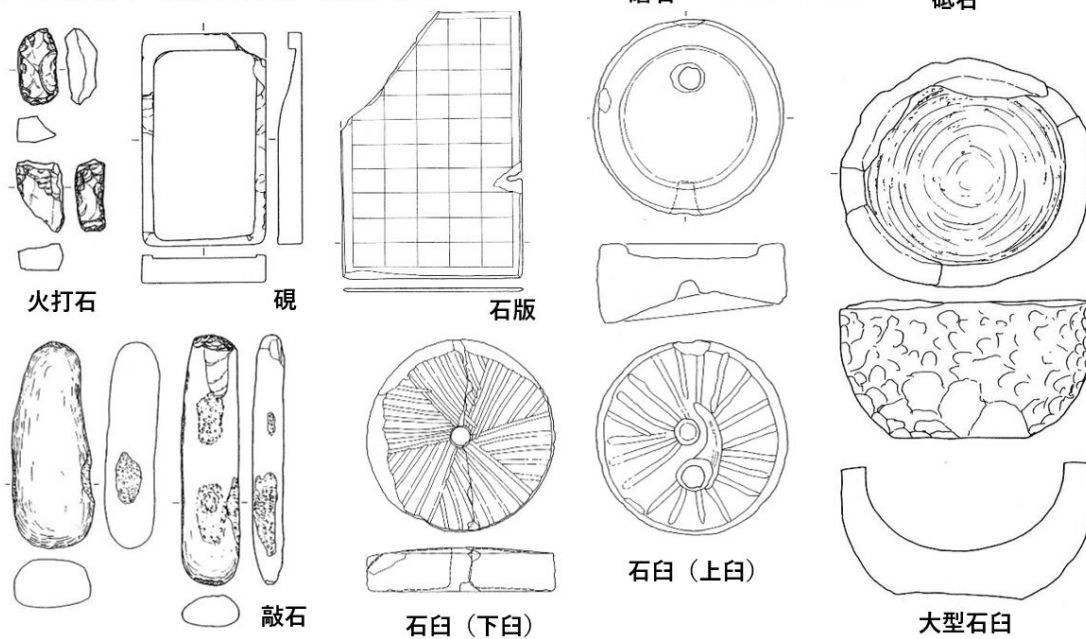


図2 山梨の古代石器文化(弥生時代時代・江戸時代以降)

狩猟具である石鏃は黒曜石で作られることが多い。土掘り具の打製石斧は粘板岩などの片理しやすい石材が利用される。敲打・磨製石器は、緑色岩や凝灰岩といったガラス質ではないが硬質の石材が多い。礫塊石器は、多孔質の安山岩などの比較的軟質な石材が用いられる。

石鏃は基本的には信州産の黒曜石で作られている。最大長が3～4 cm程度の小型の原石を大量に持ち込んで、遺跡で剥離して剥片素材を得て、さらにその剥片を細かく加工して製作している。こうした製作工程は、弥生時代中期まで継続的にみられる。一方、このほかの打製石器は、基本的には遺跡外で製作され、剥片や製品の状態で持ち込まれる場合が多く、特定の石材に偏ることなく、多様な岩種がみられるのが特徴である。

こうした多様な石材を用いるは、文化的な品物が本来もっている、人間社会における根源的な意義が背景にあると考えられる。道具はある機能をはたすだけではなく、人間相互のコミュニケーションを取り結ぶものとして作り出されたとする考え方がある。石槍や石鏃は、狩りの道具であるが、現在の狩猟民族の研究では、狩猟具も贈り合っている状況が確認されている。旧石器時代や縄文時代、弥生時代の狩人も、自ら持ち込んだ原石で作った石槍や石鏃を、一緒に狩りをする他の狩人に相互交流のために贈与しあっているとも考えられる。また、特に縄文時代では、遺跡に作った痕跡のない道具は、他集落から持ち込まれて、その集落の住人に贈られたものである可能性がある。いろいろな地域の人々から贈られるので、多様な岩種で構成されることになると考えられるのである。縄文時代のような定住生活では、それぞれの地域や集落で独特の特産品が出現し、それをもって交流していたことが考えられる。この特産品コミュニケーションは、やがて弥生時代や古墳時代の玉造や金属製品などの専業集団を生み出す社会的下地を作ることになると想定できる。

3. 黒曜石の分析化学

多様な石材のなかで、黒曜石は見た目ではなかなか産地まで分別することは難しいが、近年では蛍光X線分析法によって大量の資料を対象として、産地を推定する方法が開発されている。対象資料にX線を当てると、含まれる元素ごとに違った波長の蛍光X線が放出され、その強度を測定することで、対象資料に含まれる元素構成を知ることができる。黒曜石の産地ごとに元素の構成が異なるが、長年の研究により日本列島の70ヶ所以上の黒曜石原産地が識別できるようになった。山梨では1990年代に興水達司氏らによって中性子放射化分析による黒曜石産地分析も試みられているが（興水ほか1994）、2000年代に望月明彦氏と池谷信之氏によって多くの資料が分析されている（図3）。

山梨に持ち込まれている黒曜石の原産地では、諏訪湖北方から和田峠周辺、八ヶ岳西部などの十数か所の信州産黒曜石、伊豆七島のひとつ神津島産黒曜石、伊豆半島中部天城山中にある柏峠産黒曜石、箱根や湯河原で産出する箱根産黒曜石が知られている。旧石器時代の横針前久保遺跡で神津島産が、丘の公園第1・第2遺跡で天城産が確認され、産地不明の黒曜石も認識されているものの、箱根産は確認されていない。信州産黒曜石は、諏訪湖側の星ヶ台産を中心とするが、和田峠北側の複数の産地や、八ヶ岳西部の蓼科産も一定量確認されており、特定の産地に頼りきる状況は見出されない。

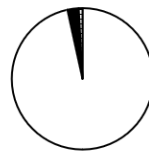
縄文時代では、膨大な資料に対して分析された量はごくわずかではあるものの、信州産黒曜石が中心となるとみられる。特に信州産の中でも和田峠の諏訪湖側にある諏訪星ヶ台が主体を占めるようになるものの、他に採掘遺跡のある和田鷹山産、八ヶ岳西部の蓼科冷山産など10か所ほどの産地からの持ち込みが少量ずつではあるが確認されている（図3）。

旧石器時代

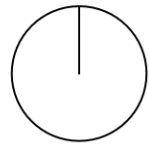
エリア	産地名	横針前久保遺跡	丘の公園第1遺跡	丘の公園第2遺跡	天神堂遺跡	物見塚遺跡
和田 (WO)	ブドウ沢	0	0	0	0	0
和田 (WO)	牧ヶ沢	0	0	0	0	0
和田 (WO)	高松沢	0	0	1	0	0
和田 (WD)	芙蓉ライト	0	0	3	54	0
和田 (WD)	鷹山	0	1	6	117	0
和田 (WD)	小深沢	0	24	2	2	0
和田 (WD)	土屋橋北	0	18	19	4	0
和田 (WD)	土屋橋西	3	0	13	134	0
和田 (WD)	土屋橋南	0	0	0	1	0
諏訪	星ヶ台	103	51	152	422	0
蓼科	冷山	7	27	131	0	28
蓼科	双子山	0	10	3	0	0
天城	柏峠	0	2	8	0	0
神津島	忍馳島	3	0	0	0	0
不明産地1	NK	1	29	11	0	0
不明産地2	XO	0	92	39	0	0
総点数		117	254	388	734	28

引用文献 望月2000 望月2007 保坂・望月・池谷2001 保坂・望月・池谷2003 杉原・金城2010

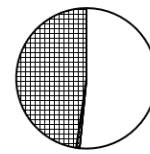
横針前久保遺跡



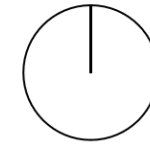
天神堂遺跡



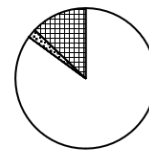
丘の公園第1遺跡



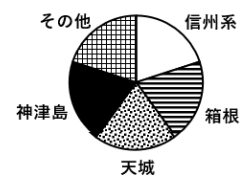
物見塚遺跡



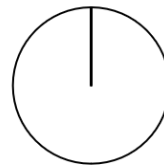
丘の公園第2遺跡



凡例



酒呑場各住居（推定）



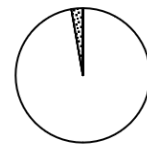
縄文時代

酒呑場遺跡（推定）	J区3住 (五箇ヶ台)	I区16住 (猪沢)	I区49住 (藤内)	I区43住 (井戸尻)	J区7住 (曾利V)
和田 (WO)	0	1	0	0	0
和田 (WD)	31	155	9	1	31
諏訪	229	1413	62	18	165
蓼科	3	5	0	0	1
神津島	0	1	0	0	0
総点数	263	1575	71	19	197

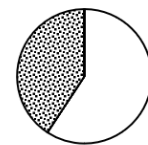
抽出資料	J区3住抽出	I区16住抽出	I区49住抽出	I区43住抽出	J区7住抽出	全体抽出
和田 (WO)	ブドウ沢					2
和田 (WO)	牧ヶ沢	1				
和田 (WO)	高松沢					1
和田 (WD)	芙蓉ライト	1				3
和田 (WD)	鷹山	3	4	3	1	7
和田 (WD)	小深沢	1	2			2
和田 (WD)	土屋橋北		1	2		4
和田 (WD)	土屋橋西		1	1		4
和田 (WD)	土屋橋南					9
諏訪	星ヶ台	23	47	16	18	21
蓼科	冷山	3	5			1
神津島	忍馳島		1			5
下呂石						2

引用文献 望月・保坂2003a

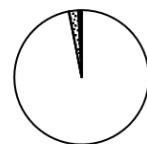
大木戸1住（諸磯b）



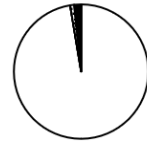
大木戸2住（諸磯b）



大木戸4住（諸磯b）



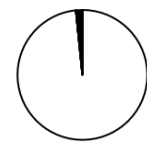
大木戸11住（諸磯b）



大木戸7住（藤内）



大木戸8住（井戸尻）

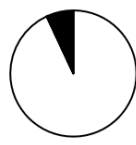


大木戸遺跡（重量）	1住 (諸磯b2)	2住 (諸磯b1)	4住 (諸磯b3)	6住 (諸磯b)	9住 (諸磯b3)	11住 (諸磯b3)	7住 (藤内)	8住 (井戸尻)
信州系	289.64	261.87	979.79	357.05	108.18	115.3	571.73	574.86
箱根	0	0	1.42	0	0	0	0	0
天城	8.14	180	21.58	1.67	3.29	1.13	2.74	0
神津島	0	0	8.22	0	0	1.97	4.61	9.35
その他	0	0	0	0	0	0	0	0
黒曜石全体重量	297.78	441.87	1011.01	358.72	111.47	118.4	579.08	584.21

引用文献 望月・保坂2003b

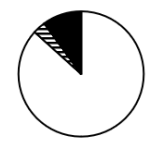
※分析資料82点の中に信州系として、和田小深沢9点、和田鷹山3点、和田土屋橋北3点、和田芙蓉ライト1点、諏訪星ヶ台1点が含まれる。

宮の前遺跡（曾利IV・V・称名寺）



塩瀬下原遺跡（堀之内）	
和田 (WD)	鷹山
諏訪	星ヶ台
蓼科	冷山
神津島	忍馳島
箱根	鍛冶屋
母岩資料数	30

塩瀬下原遺跡（堀之内）



宮の前遺跡（曾利IV・V・称名寺）	
信州系	758.1
箱根	0
天城	2.7
神津島	53.9
その他	0
黒曜石全体重量	814.7

引用文献 望月・保坂2003c

引用文献 望月2001

図3 山梨県内の黒曜石原産地分析の成果

神津島産は北杜市酒呑場遺跡で中期貉沢式期に1点みられる程度であるが、甲府盆地東部の甲州市大木戸遺跡では前期後半諸磯式期や中期藤内式期・井戸尻式期にも少量確認されている。また、県東部の中期末の西桂町宮の前遺跡や後期堀之内式期の大月市塩瀬下原遺跡でも一定量確認されていて、神津島産は県東部ほど多く入っているものの、全体量の数%を超えることはないようである。さらに天城産は大木戸遺跡では前・中期ともに確認され、前期での持ち込み量が多い。箱根産は縄文時代の遺跡で極少量報告されている程度である。特に注目されるのは、他地域では極まれな湯河原の鍛冶屋産が主体を占める点が特徴的で、明治大学古文化財研究所による分析データでも、釈迦堂遺跡群や富士吉田市池之元遺跡で確認されている（明治大学古文化財研究所 2009）。他地域で通常みられる箱根産は畑宿であるが、大木戸遺跡の平安時代溝に混入品として1点が確認されたのみである（望月 2003）。弥生時代では、杉山浩平氏・池谷信之氏が分析を行っているが、ほとんど諏訪星ヶ台が主体を占める状況を確認している（杉山・池谷 2007）。

引用文献

池谷信之 2009『黒曜石考古学』新泉社

杉山浩平・池谷信之 2007『縄文／弥生文化移行期の黒曜石研究Ⅱ』

奥水達司・戸村健児・河西学・古川和男 1994「中部・関東地方の遺跡出土黒曜石の原産地—山梨県の遺跡に関する推定例—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第5集

保坂康夫・望月明彦・池谷信之 2001「黒曜石原産地と石材の搬入・搬出—丘の公園第2遺跡の原産地推定から—」『研究紀要』17、山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫・望月明彦・池谷信之 2003「石材管理と石器製作—山梨県天神堂遺跡の黒曜石産地推定と原産地クラスターの抽出から—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集

保坂康夫 2003a「酒呑場遺跡出土の黒曜石分析の目的と方法」『酒呑場遺跡（第4次）』山梨県埋蔵文化財センター

保坂康夫 2003b「大木戸遺跡の黒曜石分析の目的と成果」『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター

望月明彦 2000「黒曜石の産地推定」『横針前久保遺跡・米山遺跡・横針中山遺跡』山梨県埋蔵文化財センター

望月明彦 2001「塩瀬下原遺跡（第4次調査）出土の黒曜石製石器の産地推定」『塩瀬下原遺跡（第4次調査）』山梨県埋蔵文化財センター

望月明彦 2003a「酒呑場遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『酒呑場遺跡（第4次）』山梨県埋蔵文化財センター

望月明彦 2003b「大木戸遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『大木戸遺跡』山梨県埋蔵文化財センター

望月明彦 2007「丘の公園第1遺跡出土黒曜石産地分析推定結果」『丘の公園第1遺跡』北杜市教育委員会

望月明彦・保坂康夫 2003c「西桂町宮の前遺跡での黒曜石産地分析」『宮の前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター

明治大学古文化財研究所 2009『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集（1）—』

明治大学古文化財研究所 2011『蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定—基礎データ集（2）—』

日本列島形成史から山梨県内の扇状地形を読み解く

山梨県立大学 奥水達司

はじめに

扇状地とは、狭い山間地を流れる河川が広い平坦地に出た時、その流れが弱まることにより、背後から運ばれてきた土砂が扇状に堆積してできた土地のことを言います。この扇状地形を形成するために、背後の山肌を削り取って運搬することが必要となり、この事情から背後の山が高標高であるほど、あるいは急傾斜であるほど、土砂の供給も活発になり、下流部での扇状地は発達し易くなります。この点からすると、山梨県には、本邦における高標高の山のトップ3が存在し、山地側からの供給が活発である地域特性を有することは理解し易いわけです。もちろん、このような土砂を始めとする山地側からの物質移動を促進するには、地形・地質の点のみならず降雨・降雪の関与も重要になります。また、地震等による地盤振動も無視することは出来ません。

山梨県内の扇状地として典型的な例として、御坂山地の麓に位置する、一の宮・勝沼地域の扇状地については古くから義務教育等の教材にも取り挙げられています。これ以外にも、南アルプスの麓には御勅使川扇状地や、御坂山地においては上記以外にも山地北斜面における甲府盆地の南部地域や、御坂山地南斜面の富士五湖地域など、内外に広く知られている扇状地の分布が県内には多数存在しています。また、山梨県と静岡県との県境を跨ぐものとして、富士山西斜面に発生源を持つ、大沢扇状地は土砂移動の活発さからも、社会的に極めて注目度の高い扇状地です。

こうした山梨県内の扇状地形は、現在もその形成が継続しているわけであり、その形成に関する特性等につき認識し、これを我々は生活や産業活動の舞台として活用してきています。改めて、その舞台となる扇状地の成り立ちや経緯を歴史科学的にひも解いてみると、自然の営みの明と暗の二つの側面を知ることができます。なかんずく、これら扇状地の形成の過程で、過去における規模の大きな土砂移動における人間生活への影響につき、この機会に理解しておくことは、今後の防災面でも重要な役割を果たすものと思います。

そこで、地球科学分野の近年における学術的な進展も絡めた視点から、本州中央部の地形・地質形成史と一体で山梨県内の扇状地形を読み解きながら、我々の足元で長い時間スケールで繰り広げられている、地球の動的な姿につき歴史科学的に理解を図ってみます。

本邦における高標高の山々の近代科学による理解

南アルプスや富士山に限らず、本邦の山の持つ魅力が広く理解され注目度が上がる節目は、中世以降現在までには何度かありました。その中で、江戸時代の長い鎖国が解け明治政府になって、西欧文化の取り入れの盛んな時期もその一つであることは間違いありません。日本が近代化の遅れを一気に取り戻す目的で、西欧文明をひたすら取り入れようとした文明開化の頃は、多くの外国人技師や知識人を招いた時期です。この時、外国人によっ

て、富士山をはじめ本邦の多くの山々が登られ、その魅力も理解されました。その過程で、登山家としても良く知られた宣教師ウエストンによって北岳などの一連の山については「日本南アルプス」と名付けられたわけです。しかも、それ以上に重要でかつ注目すべきこととして、彼ら外国人によって、近代登山だけでなく地形・地質学や動・植物学などの近代科学も当時の日本に取り込まれ、日本の自然科学研究の前進が一気に図られたのも、この時期だったのです。この中で地形・地質学の分野においては、今から約 130 年前に、ドイツからの御用学者エドモンド・ナウマンは、調査旅行で八ヶ岳（具体的には平沢峠付近）を訪れた際に、北岳・甲斐駒ヶ岳など南アルプスと、その手前に広がる低地側との互いの地形的ギャップを観て驚き、低地側をフォッサ・マグナと命名しました（図1）。

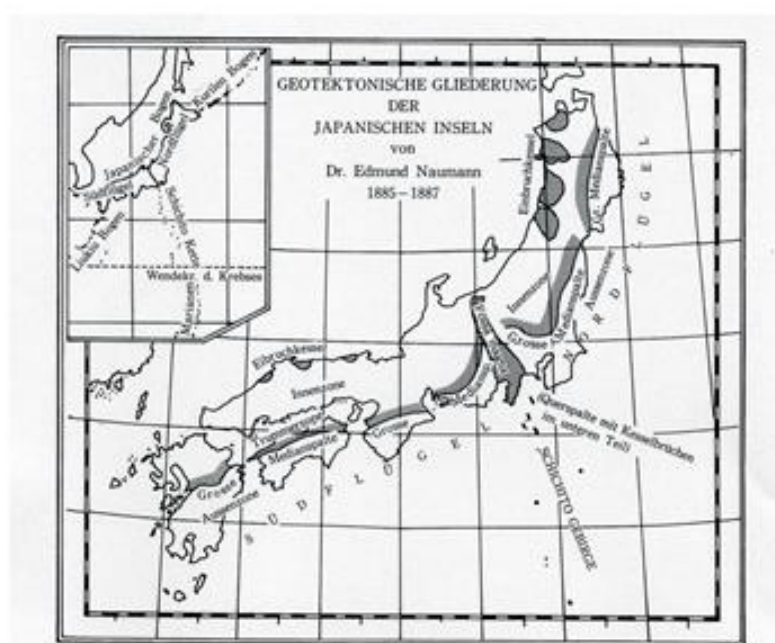


図1：ナウマンによる日本の地質構造の総括（ナウマン，1893）

このことを記念して、現在の八ヶ岳獅子岩駐車場（＝平沢峠）には、石碑に学術的価値が刻まれています。この平沢峠の場所こそ、日本列島の地質構造発達史の本格的な議論が開始された地点でもあるわけです。すなわち、北の糸魚川から南の静岡まで、地形的に対立する付近を糸魚川―静岡構造線が走っているのです。構造線とは、基本的に断層であり、この断層を境にして、互いの地質の構成や時代が大きく異なるものを特に構造線といいます。実際の糸魚川―静岡構造線（以下“糸―静線”と呼ぶ）を山梨県内で辿ってみると、小淵沢町国界橋付近～武川町精進ヶ滝入り口付近～南アルプス市夜叉神トンネル西側付近～

早川町新倉地域を通過しています。

この糸―静線がフォッサマグナの西の縁であり、一方で東の縁には、当時は新潟県柏崎付近を起点にして太平洋側の千葉県銚子方向に延びる、概ね北西～南東方向の構造線が想定されていました。この二つの構造線の間に入る地域が、長い期間にわたってフォッサマグナとして理解されてきました。

20世紀後半以降の地球科学の進歩

20世紀後半以降の地質・地形等の著しい科学的進歩の過程の中で、フォッサマグナの東縁の構造線については、重要度が低くなってきています。実際に、上述の新潟県柏崎～千葉県銚子付近に走るとされている構造線付近においては、東西の互いの地形や地質につき極端な違いを見出すことは困難な状況です。これに対して、フォッサマグナ西縁とされる糸―静線は地質学的に日本列島を東西に二分するばかりでなく、同時に現在ではユーラシアプレートと北米プレートの境界として位置づけられています。つまり、糸―静線は地球規模の視点から見ると東アジアにおいて第一級の活動的な地域になるわけです。

この地球科学の進展状況を理解するためには、19世紀後半のナウマンの時代から20世紀半ば頃までの山（凸状の地形・地質）のでき方の変遷を知る必要があります。ナウマンの時代には、基本的に上下方向の運動に主たる要因を求められ、フォッサマグナ（低地）側に山梨県の主体（甲府盆地など）が位置する考え方で、ここに100～150 km幅が陥没したと理解されてきました。しかし、20世紀後半の1960年代に登場した地球科学では革命的パラダイム、すなわち地球表層部の凹凸地形の形成は基本的に水平運動に起因する、という大変換が提示され、多くの地球表層部の地形・地質の成立ちが合理的に理解できるようになりました。結局、地球科学の進歩の過程で、フォッサマグナの東縁は、むしろ存在しない方が合理的であることが、広く認識されるようになってきています。

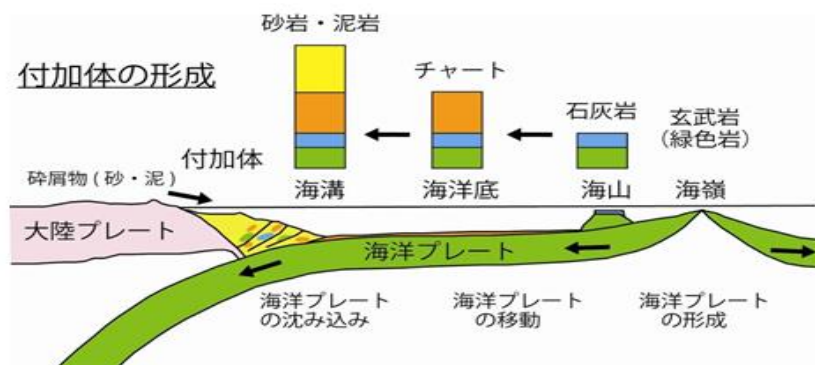


図2：日本列島付近における水平的な海洋プレートと大陸プレートの動き

一方で、ナウマンが 1800 年代後半に示した地質構造図において、本州中央部が「屈曲している」点（図 1 の本州中央部の屈曲）については、長くその形成の仕組みが謎とされてきました。これは現在の日本列島地質図（図 3）においても、ナウマンの指摘と同様に本州中央部が屈曲しており、ナウマンの研究水準の高さを示しています。この屈曲構造のできる仕組みの解明は、地球科学研究者へのナウマンからの大きな宿題でもあったわけです。

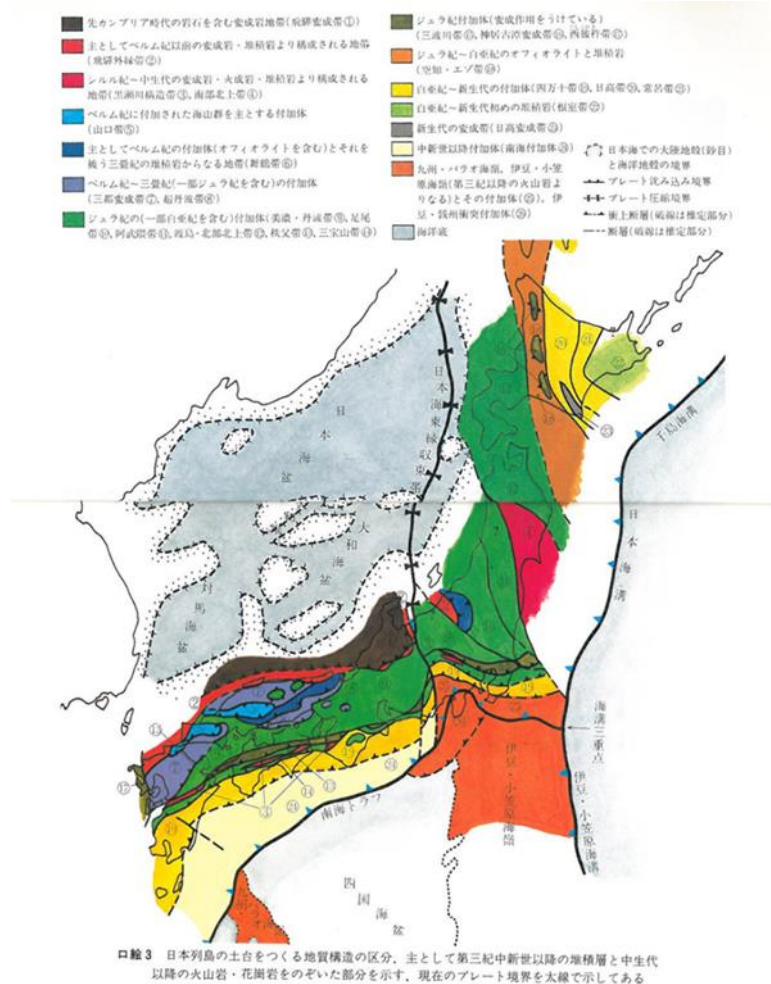


図 3：日本列島の地質構造の区分図（平，1990）

このナウマンの宿題の解明には、当時から 100 年の後、つまり 1980 年頃以降のプレート・テクトニクス研究の発展的な成果まで持ち越されたわけです。単なるベルトコンベアの運動ではなく、水平移動するプレートの上に「物が載って移動・運搬」されていることが科学的に確認されたことです（図 2）。しかも、プレート上に載るモノ全てが地球内部に潜り込むのではなく、一部が大陸縁辺に付着（学術用語として「付加」と呼ぶ）して、結果的にユーラシア大陸の外側に向かって大陸が成長する、という日本列島の形成の一般則が広く認識されるようになりました（図 2、3）。この大陸成長の概要・概念は、県立大学の今までの講座でも紹介したので、その詳細は省略しますが、この仕組みの中で、本州中央部が

屈曲した経緯が地質学的スケールの時間と空間的な視点からも理解できるようになりました。こうして、山地・山脈等の山の成立ちが、表層的な面のみならず、地球内部エネルギーの開放・発散という大きな運動の仕組みと一体での理解が進んできているわけです。そして、この形成の仕組みが解明される過程で、山梨県周辺には、本邦の高標高の山々が幾つも形成されたばかりでなく、その結果として低標高側に土砂の移動も活発に進行したわけですから（図4）。

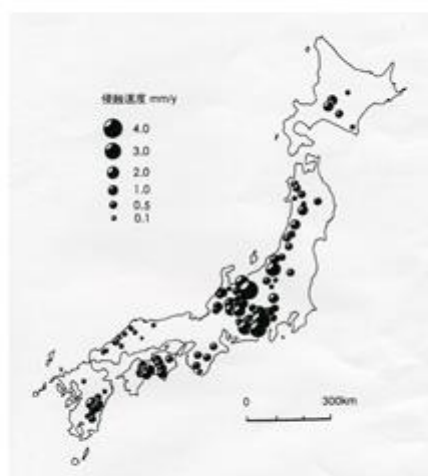


図4：本邦における土砂移動多発地域（大森，2001）

この過程で、甲府盆地周辺域には概して規模の大きな扇状地が形成されてきました。たとえば、盆地西部には御勅使川扇状地が、また盆地東部の釈迦堂インターチェンジ付近を中心に発達する一宮扇状地、そして勝沼扇状地などです。

扇状地形成の明と暗

我々の住む山梨県の場合、例えば甲府盆地周辺には、規模の大きな扇状地が多く分布し、御勅使川扇状地を筆頭に、その規模が大きいい扇状地には、しばしば歴史的に忘れてはならない規模の災害発生が少なくありません。自然の営みと我々の生活が共生していくためには、この自然の変化を歴史科学的に知り、その備えに人工的な策を施すことも重要になります。この点で、富士山の大沢崩れの備えを強化するために、富士砂防事務所が富士宮市内に、また南アルプス側の土砂崩壊に備え、富士川砂防事務所が甲府市富士見町に夫々設置され、共に有効に機能してきています。

この点の有効性を端的に物語る事実として、例えば富士川砂防管内において、昭和 34 年（1959 年）の台風によって多くの尊い命が失われたものの、その後の昭和 57 年（1982 年）の台風時には日雨量としては、昭和 34 年の 2 倍程度の条件に見舞われたものの、砂防堰堤の設置等の策により、死者をゼロとすることに成功した例については、この講座の中で以前にも紹介しました。

一方で、過去の規模の大きな土砂災害が扇状地を形成する過程で、尊い命が失われる中で貴重な動物の生息環境をもたらした、という事例もあります。これについては、御坂山地の南麓の西湖周辺の土砂災害に関するものです。これは、西湖を基準にみた場合、西湖の北斜面からの、すなわち御坂山地側からの表層水の湖への流入に伴って運搬・堆積された土石流が、西湖の北岸に扇状地を形成するプロセスで説明されるものです。そのプロセスについて地質学時間スケールでは、過去から何度も土砂の運搬があったことは近年の湖底ボーリングコアから指摘され、最近における百年程度の中でも、3 回の大きな土石流が湖に流入した可能性が指摘されています（興水ほか，2010）。この 3 回の土石流のうち、最も近い事例は 1966 年に対応し、この時には御坂山地から河口湖西岸のみならず、むしろ西湖への土石の流入の方が遥かに激しいものでした。

この土石流をもたらした 1966 年の台風 26 号は、西湖付近を直撃・通過し、大量の土石が御坂山地側からの表層水によって運搬され、根場(ねんば)地域を中心に当時の新聞には死者が 83 名を数えた、と報告されています。根場以外にも西湖北側集落は大きなダメージを受ける土石流災害であり、その後の数年間の復旧状況の資料を図 5 に示します。

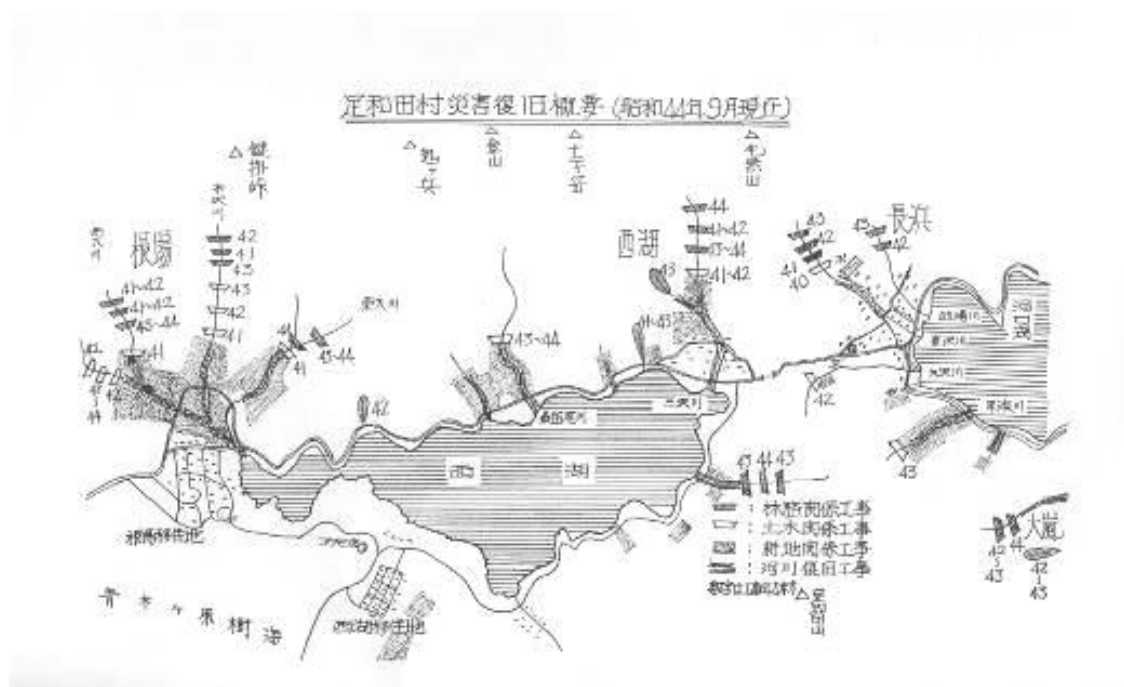


図 5. 西湖付近における昭和 41 年の土石流分布及びその後の災害復旧概要（足和田村，1969）

西湖への土石流の流入は、1966 年以前に遡っても何度も記録されていることは前述の通り予測できます。この中で、1966 年の大規模土石流の直後においては、西湖の北側の集落がまとまって、土石流の発生の危険性が少ない地域へ移動しています(図 6)。このように、西湖の特に北側湖岸地域は、歴史的にみると土石流災害をしばしば経験してきたことが想像できるわけです。

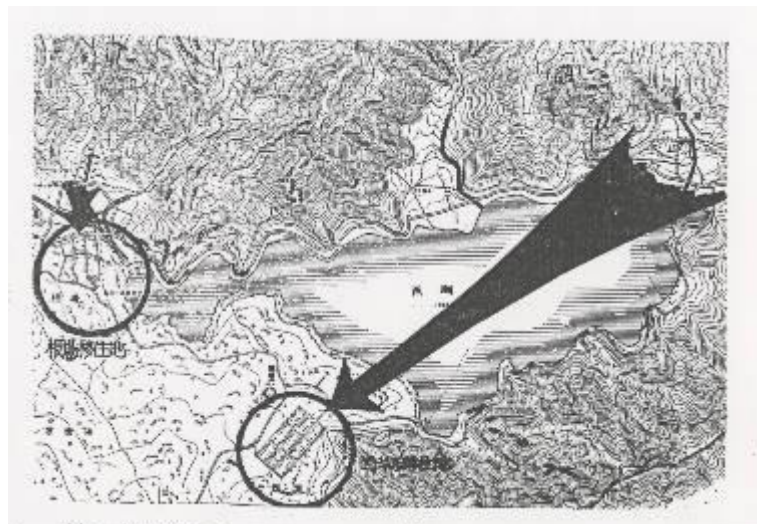


図 6. 西湖北岸地域における土石流災害の甚大地域から集落の移動（足和田村，1969）。

しかし、その一方で、この西湖にかつて絶滅したと考えられ、その後に絶滅したとされてきたクニマスが、70 年振りに、その生息が確認された (Nakabo, et al., 2011)、ということも忘れることができません。しかも、クニマスの生息している場所が、西湖の湖水中の特に北側湖岸付近に限定されていることもわかってきています。水深約 30~40 メートルの砂礫の卓越している場所を、生き永らえたクニマスは、その住み処にしている情報も考慮すると、扇状地をつくる土石流堆積物の恩恵によって、クニマスは生息環境が得られたことにもなります。つまり、この西湖北岸を中心に襲った土石流は、そこに住む人間にとって風水害としては難題であり、時に尊い人命が失われたわけです。しかし、皮肉なことです、この土石流の存在こそがクニマスに対して、恵まれた生存環境を与えた、という自然の仕組みとして説明できることになります。

これは、扇状地形成にまつわる自然の明と暗になりますが、近年では従来に経験した自然現象を超える場面にも出くわすようになってきています。人の一生の 100 年レベルでの自然の認識ではなく、地球史の時間軸からの理解も含め、自然をシステムとして理解する努力は、自然災害の予防に貢献するように思います。

文献

足和田村(1969) 昭和 41 年 9 月 25 日発生台風 26 号災害から復興まで. 33p.

興水達司・小林 浩(2010) 富士山北麓の水循環システムと土石の流れ. 第 20 回環境地質学

シンポジウム論文集, 1-6.

松田時彦 (2006) 中部地方の地層と地質構造. 日本の地形 5 中部, 8-16.

Nakabo, T., Nakayama, K., Muto, N. and Miyazawa, M. (2011) *Oncorhynchus kawamurae* “Kunimasu”, a deepwater trout, discovered in Lake Saiko, 70 years after extinctions in the original habitat, Lake Tazawa, Japan. *Ichthyol. Res.* 58(2), 180-183.

Naumann, E., (1893) Die Fossa magna. In “Neue Beitrage zur Geologie und Geographie Japans”. *Erganzungsheft No. 108 zu Petermanns Geographische Mitteilungen*, 16-36.

大森博雄 (2001) 日本島山地における隆起と侵食のダイナミックス. 地球, No32, 14-21.

平 朝彦 (1990) 日本列島の誕生、岩波新書、226p.

ヒトと自然が作り出した山梨県の昆虫相

北杜市オオムラサキセンター研究員 小粥隆弘

はじめに

昆虫好きな筆者にとって、山梨県はとても居心地のいい場所です。山梨県は、富士山をはじめ南アルプス、八ヶ岳、奥秩父など多くの山岳に囲まれています。幅広い標高帯は、複数の気候帯を内包しています。それぞれの気候帯は、特有の植生帯や昆虫を含む動物群集を維持します。

山梨県の豊富な昆虫の多様性を保つ要因は、山岳帯だけではありません。北杜市を中心に広がる里山林は、カブトムシ、クワガタ、そして国蝶オオムラサキなどたくさんの昆虫の生息地になっています。多くの人は、「豊かな自然」をイメージするとブナ林のようなヒトの手が入っていない極相林を思い浮かべるかもしれませんが、しかし、中規模攪乱仮説（Horn, 1975; Mayor et al., 2012）として挙げられているように、伐採や下刈りなどの人為的攪乱は、林内の照度を保ち、多種多様な植物やそれらを食べる動物の絶好の生息地になります。近年、このようなヒトが作り上げてきた生物多様性の高い里山林が、里山林の管理放棄によって損なわれてしまうことが危惧されています。政府は、生物多様性国家戦略 2010 の中で里山林の減少・衰退を、生物多様性が失われる 3 つの危機の内の一つ「人間活動の縮小による危機」として挙げています。

一方で、土砂崩れなど自然攪乱の頻度が高い場所にも、その環境特有の昆虫が存在することが分かってきました。例えば、近年、Shallow subterranean habitat と呼ばれる斜面土砂移動地（以下、崩壊地）の地下浅層から、眼や体色が退化し、地下環境に適応した新種の節足動物が次々と発見されています（ex. Barranco et al., 2013; Olmi et al., 2014）。

本稿では、ヒト（人為的攪乱）と自然（自然攪乱）が作り出した生態系に着目しつつ、なぜ山梨県に豊富な昆虫相が存在するのかをご紹介します。

ヒトが作り出したオオムラサキが舞う里山林

オオムラサキ *Sasakia charonda* は、チョウ目タテハチョウ科に属する蝶の一種です（図 1）。体が大きく、美麗であり、国内のほとんどの場所で観察される身近な蝶であることから、1957 年、日本昆虫学会によって国蝶に指定されました（栗田貞多男、2007）。オオムラサキの幼虫はエノキ、エゾエノキ、成虫はクヌギやコナラの樹液をエサとし、これらの落葉広

葉樹が生える里山林に多く生息します (Kobayashi, et al., 2004; Kobayashi et al., 2009)。しかし、里山林の減少に伴った生息地の縮小が危惧され、本種は環境省レッドリスト 2017 で準絶滅危惧種に指定されています。オオムラサキを保全する方法として、全国各地で広葉樹の植林や放蝶などの活動がなされていますが、統計学的に個体数の増加に繋がった報告はありません。



図1 オスのオオムラサキの成虫。

山梨県北杜市長坂町周辺（旧日野春村）は、全国的にオオムラサキ個体数が最も多い地域とされ（環境庁, 1979）、北杜市の昆虫にも指定されています。1980 年より、山梨国蝶オオムラサキを守る会（特定非営利活動法人自然とオオムラサキに親しむ会の前身）は、オオムラサキ保全のための基礎データの収集を目的に、長坂町内でオオムラサキ有視界調査を開始しました。初年の調査は、日野春村民の有志で行われ、1981 年以降は、長坂町立長坂中学校（現：北杜市立長坂中学校）の学生が中心に行っています。さらに 2004 年からは北杜市立甲陵中学校も調査に加わりました。

本章では、これまでのオオムラサキ有視界調査で蓄積したデータを統計学的に解析した結果の一部をご紹介します。詳細な調査方法や結果は、小粥（2018）をご参照ください。また、本章で用いている写真や図は同論文から引用しています。

オオムラサキ有視界調査は、山梨県北杜市長坂町の JR 長坂駅から JR 日野春駅の整備されたハイキングコース（オオムラサキ自然遊歩道）で行われました（図 2）。オオムラサキ自然遊歩道は全長約 10 km で、約 200 m おきに白色のポールで区切られ（計 44 本、43 区間）、毎年 7 月中旬にオオムラサキ自然遊歩道の 1 区間 200 m を 2～4 名の中学生で調査しました。1980～2017 年の有視界調査データを基に、調査区間ごとに経年変化がオオムラサキ個体数へ与える影響を一般化線形混合モデル (GLMM) で解析し、経年の増加が最も大きかった 3 調査区間を選定しました。この 3 調査区間で



図2 調査地の地図。オオムラサキ自然遊歩道（灰色の線）を、200 m おきに白色のポール（白色の点）で調査区間を区切っています。

は、1 調査区間当たり 1 年毎に推定 0.35 個体増加していました（図 3）。また、3 調査区間の植生に着目すると、アカマツ林から落葉広葉樹林へ変化していたことが分かりました。これ

は、約 15 年前に県のマツクイムシ防除政策の一環で、アカマツ林を皆伐し、エノキやクスギ、コナラなどの落葉広葉樹を植林した結果です。

オオムラサキの景観生態学的な先行研究では、エノキを含む落葉広葉樹林面積が大きくなるほどオオムラサキの越冬幼虫個体数が増加していたことから、オオムラサキの保全にはエノキを含んだ落葉広葉樹の植林が重要であることが示唆されています (Kobayashi et al., 2004; Kobayashi et al., 2009)。これに対して、本研究は落葉広葉樹の植林後にオオムラサキ成虫個体数が実際に増加したことを示した初めての研究例です。特定非営利活動法人自然とオオムラサキに親しむ会では、オオムラサキの保全を目的に 2008 年より北杜市長坂町、須玉町を中心に、落葉広葉樹 (エノキ、クスギ、コナラ) の植林活動を年間面積 30 ha (約 1 万本) 行っており、同時に下刈りや間伐などを実施しています。本研究により、エノキやナラ類の落葉広葉樹の植林はオオムラサキの増加に繋がることが明らかになったことから、当団体の里山管理活動 (特に植林活動) がオオムラサキの保全に寄与していることが示唆されました。

オオムラサキは、里山林の生物の豊かさを示す環境指標生物です。つまり、たくさんのオオムラサキが生息する林には、カブトムシやクワガタ、スズメバチなどの他の多くの昆虫も棲むことができます。里山林に生息する昆虫をもう一種だけご紹介しましょう。それはトゲアリ *Polyrhachis lamellidens* です (図 4)。北杜市や韮崎市周辺では普通に見られるものの、環境省のレッドリスト絶滅危惧Ⅱ類に指定された絶滅危惧種で、全国的に生息数が減少しています。本種は一時的社会寄生という特殊な生態をしていて、トゲアリの女王アリは、クロオオアリの巣を乗っ取り、トゲアリの働きアリを育てます。働きアリの個体数が十分になると、トゲアリのみに切り株や立ち枯れへ引っ越し、新たな巣を作ります。つまり、トゲアリの保全には、クロオオアリが好む草原などの開放的な空間と、伐採された樹が存在する林が隣接した里山林が必要なのです。

北杜市では、昭和 40 年代まで里山林で切り出した木材を原料とした炭焼きが盛んに行われ、そのヒトがかかわってきた歴史性が、山梨県の豊富な昆虫相を生み出す要因の一つにな

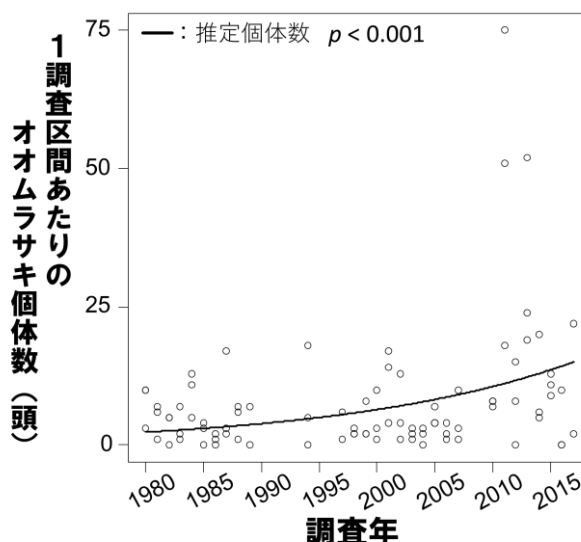


図 3 オオムラサキ個体数の増加が顕著だった 3 つの調査区間の 1 調査区間あたりのオオムラサキ個体数を従属変数、調査年を独立変数とした一般化線形混合モデルの結果。実線は、オオムラサキ個体数の推定値。



図 4 トゲアリ。成虫は胸部に大きな棘をもつ。

っています。現代は、薪に代わって石油など化石燃料が生活の主要なエネルギーとなり、私たちにとって里山林の直接的な必要性はなくなってしまいました。しかし、オオムラサキ有視界調査を例とした自然教育や郷土愛の醸成、観光資源、地域の生物多様性の保全など、里山林は現代も重要な役割を果たしています。今後も、オオムラサキが舞う里山林が維持されることを切に願います。

自然が作り出した斜面土砂移動地の地中性昆虫相

先の章では人為的攪乱によって維持される里山林についてご紹介しました。本章では斜面土砂移動という自然攪乱によって維持される崩壊地環境に着目してみましょう。

日本での崩壊地の節足動物相の研究は、吉田正隆氏（徳島市）が中心となって四国地方で行われ、オサムシ科ナガゴミムシ属の 22 新種を発見しています（Ito, 2010, 2012）。筆者は、幼少の頃から新種発見の夢を持っていたことから、崩壊地での節足動物相調査を開始しました。筆者と長澤亮氏（横浜市、図 5）、田中健太氏（筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所）らは、2013 年に予備調査の一環として長野県上田市菅平高原に地中トラップを設置しました。



図 5 崩壊地で調査中の長澤亮氏。

地中トラップとは、吉田氏が開発した新しい採集方法です（吉田, 2012）。入れ子状になったプラスチック容器を、ベイト（誘引物質）とともに地中に埋没させて節足動物を捕獲します。従来の土壌性節足動物を採集するベイトトラップは地表に設置するため地中性種は稀にしか獲られませんでした。地中トラップの登場により、これまで困難だった地下の節足動物採集が容易になりました。ただ、地中トラップは崩壊地の地下 50 cm に埋没させる必要があるため、バールを使って瓦礫を掘らなければならない、大変な肉体労働です。

2013 年 12 月 18 日、菅平高原の崩壊地に計 9 個の地中トラップを設置しました。菅平高原は多くのスキー場があることで有名で、冬場には大量の雪が積もります。調査当日はあいにくの吹雪で、雪をかき分け土壌面を露出させて掘削しました。水分を含んだ土壌は、掘り起こしたと同時に氷点下の空気にさらされ、一瞬で凍り付きました。私は 10 年以上、野外調査を経験していますが、この日ほど辛い作業はありませんでした…。

苦労して設置した地中トラップを、翌年の 5 月に回収しました。その結果、体長 2 mm にも満たない、小さなケシ粒のような甲虫が、計 51 個体獲られました。顕微鏡で観察すると、触覚の先端から 4 節目の長さが他の節よりも短く、タマキノコムシ科チビシデムシ亜科であることが分かりました。これらの個体は複眼と後翅が完全に消失し、体色も他のチビシデムシ亜科と比較して薄く、地下環境に適応した形態をしていました。この事をチビシデムシ

亜科の分類の専門家である林靖彦氏（川西市）に報告するととても驚かれました。国内の地中性チビシデムシ亜科の記録は、対馬で記録されたツシメナシチビシデムシ *Sciaphyes kawaharai* のみであり、今回採集された個体は新種の可能性が高いとのことでした。後に詳細な形態的検討がなされ、新種ニホンメナシチビシデムシ *Sciaphyes japonicus*（Hayashi et al., 2015）として記載されました（図 6）。

予備調査での成果をもとに、2014 年より、中部山岳地域全域で崩壊地の大規模な地中トラップ調査を開始しました。調査地は、長野県菅平高原・八ヶ岳山系、埼玉県奥秩父山系、静岡県南アルプスの計 4 山域を対象とし、各山域で 2～3 ヶ所の崩壊地に地中トラップを設置しました。

中部山岳地域での調査の結果、多足類ヤスデ綱、ムカデ綱、軟甲綱ワラジムシ目、鋏角綱カニムシ目、ダニ目、クモ目、ザトウムシ目、昆虫綱イシノミ目、トビムシ目、コムシ目、ガロアムシ目、シリアゲムシ目、チャタテムシ目、バッタ目、ハサミムシ目、コウチュウ目、ハエ目、ハチ目等が獲られ、その中には地中性形態種も多く含まれていました。具体的には、ニホンメナシチビシデムシの他にコウチュウ目オサムシ科、エンマムシ科から地中性形態をした計 4 種の未記載種を採集しました。このうち、長野県菅平高原の崩壊地から採集されたオサムシ科の一種が、ホソヒラタオオズナガゴミムシ *Pterostichus nagasawai*（Ito & Ogai, 2015、図 7）として記載されました。本種は地表で獲られる他のナガゴミムシ属と比較して、和名のとおりに頭部が著しく肥大し、複眼が小さく体色も薄く暗闇に適応した形態をしています。



図 6 新種記載されたニホンメナシチビシデムシ *Sciaphyes japonicus*. 写真は Hayashi et al. (2015) より。



図 7 新種記載されたホソヒラタオオズナガゴミムシ。写真は Ito & Ogai (2015) より。

上記のように、崩壊地地下には、まだまだ多数の節足動物の未記載種が眠っていると考えられます。2018 年、山梨県内でも地中トラップ調査を開始しました。ここでも予想どおり、未記載種と思われる地中性昆虫が獲られました。現在、詳細な形態観察を行っています。

日本は世界的にも斜面土砂移動（土砂崩れ）が起こりやすいホットスポットです（Hong et al., 2007）。また、これまでわが国で発見された地中性昆虫の分布を地図上でプロットすると中央構造線と重なります。中央構造線付近は断層運動が活発で、たえず土砂崩れが起こりやすい場所です。このように、山梨県を含む中央構造線上の地域は、崩壊地の研究を行う上で非常に適した地域と言えます。

おわりに

間伐や下刈りなど、人為的攪乱によって維持される里山林。そして、絶えず土砂移動が起こり、自然攪乱が頻繁な崩壊地。これらの環境は、オオムラサキや地中性昆虫など、多種多様な生物の貴重な生息地になっています。山梨県の先人たちは、自然を生活から切り離れた放置や、皆伐など完全に破壊することなく、上手に付き合ってきました。また、山梨県は中央構造線上に位置し、山岳が多く、急峻な地形が存在することで多くの崩壊地が存在しています。これらの人間活動や地質学的な歴史性が、山梨県の豊富な昆虫相を育んできたのです。山梨県を散策する時は、空を舞う蝶や、地面を歩くトゲアリへ目を向けてみてください。そして、道路わきに崩壊地を発見した際は、その地下で蠢く未知の節足動物を想像してみてください。昆虫をとおして山梨県の魅力を再発見していただけたら、こんなに嬉しいことはありません。

引用文献

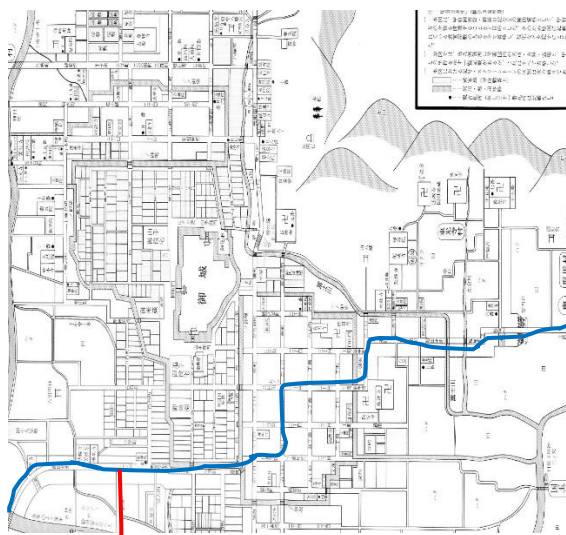
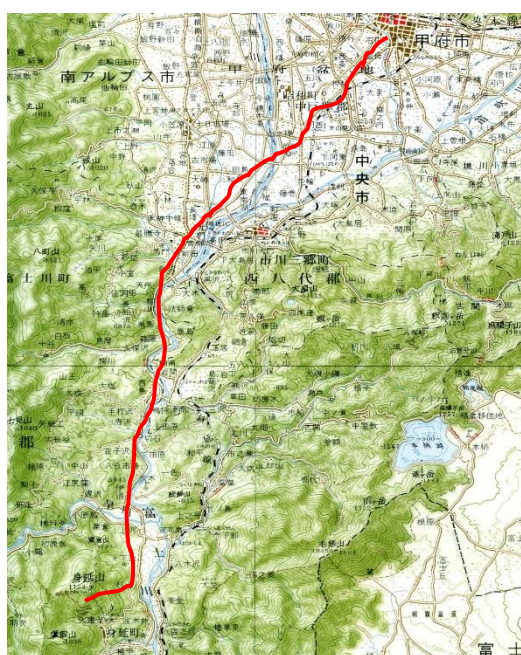
- Barranco, Pablo, Jose D. Gilgado, and Vicente M. Ortuno. 2013. “A New Mute Species of the Genus *Nemobius* Serville (Orthoptera, Gryllidae, Nemobiinae) Discovered in Colluvial, Stony Debris in the Iberian Peninsula: A Biological, Phenological and Biometric Study.” *Zootaxa* 3691 (2) : 201. <http://biotaxa.org/Zootaxa/article/view/zootaxa.3691.2.1> (December 21, 2014) .
- Hayashi, Yasuhiko, Takahiro Ogai, and Ryo Nagasawa. 2015. “Discovery of a New Sciaphyes Species (Coleoptera: Leiodidae: Leptodilini) from Honshu, Japan.” *Japanese Journal of Systematic Entomology* 21 (1) : 165–67.
- Hong, Yang, Robert Adler, and George Huffman. 2007. “Use of Satellite Remote Sensing Data in the Mapping of Global Landslide Susceptibility.” *Natural Hazards* 43 (2) : 245–56. <http://link.springer.com/10.1007/s11069-006-9104-z> (August 20, 2015) .
- Horn, H.S. 1975. “Markovian Processes of Forest Succession.” In *Ecology and Evolution of Communities*, eds. M. L. Cody and J. M. Diamond. Belknap Press of Harvard University, Cambridge, Massachusetts., 196–213.
- Ito, Noboru. 2010. “Syatematics of *Pterostichus Yoshidai* and Its Relatives (Coleoptera: Carabidae: Pterostichini) .” *Entomological Review of Japan* 65 (2) : 333–74.

- . 2012. “Five New Species of Macrocephalic Pterostichus from Shikoku, Japan (Coleoptera, Carabidae, Pterostichini) .” *Japanese Journal of systematic entomology* 18 (1) : 85–99.
- Ito, Noboru, and Takahiro Ogai. 2015. “A New Species of Macrocephalic Carabid from Nagano Prefecture, Japan (Coleoptera: Carabidae: Pterostichini) .” *Japanese Journal of Systematic Entomology* 21 (2) : 271–75.
- Kobayashi, T, T Tanimoto, and Masahiko Kitahara. 2004. “Relationship between Forest Area and Densities of the Nymphalid Butterfly, *Sasakia Charonda* Hewitson, and Its Host Tree, *Celtis Sinensis* Persoon.” *Japanese Journal of Conservation Ecology* 9 (1) : 1–12.
https://www.academia.edu/2573797/Relationship_between_forest_area_and_densities_of_the_nymphalid_butterfly_Sasakia_charonda_Hewitson_and_its_host_tree_Celtis_sinensis_Persoon (July 4, 2017) .
- Kobayashi, Takato, Tohru Nakashizuka, and Masahiko Kitahara. 2009. “Effects of Fragmentation of Secondary Broadleaf Deciduous Forests on Populations of the Near-Threatened Butterfly, *Sasakia Charonda* (Lepidoptera, Nymphalidae) , in Central Japan.” *Ecological Research* 24 (1) : 57–64.
https://www.researchgate.net/profile/Masahiko_Kitahara/publication/225118555_Effects_of_fragmentation_of_secondary_broadleaf_deciduous_forests_on_populations_of_the_near-threatened_butterfly_Sasakia_charonda_Lepidoptera_Nymphalidae_in_central_Japan/links/ (July 4, 2017) .
- Mayor, S J et al. 2012. “Regional Boreal Biodiversity Peaks at Intermediate Human Disturbance.” *Nature communications* 3: 1142. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/23072810> (June 14, 2015) .
- Olmi, Massimo, Toshiharu Mita, and Adalgisa Guglielmino. 2014. “Revision of the Embolemidae of Japan (Hymenoptera: Chrysidoidea) , with Description of a New Genus and Two New Species.” *Zootaxa* 3793 (4) : 423–40. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/24870182> (December 21, 2014) .
- 吉田正隆. 2012. “地中トラップによる地下浅層性昆虫の採集法.” *昆虫と自然* 47 (5) : 6–12.
<http://iss.ndl.go.jp/books/R000000004-I023780718-00> (February 20, 2018) .
- 小粥隆弘. 2018. “オオムラサキ国蝶指定60周年記念 約40年間のオオムラサキ有視界調査から分かってきたこと.” *昆虫園研究* 19: 3–8.
- 栗田貞多男. 2007. “オオムラサキ-日本の里山と国蝶の生活史-オオムラサキ-日本の里山と国蝶の生活史-”. 長野県: 信濃毎日新聞社. <http://ci.nii.ac.jp/naid/10025020601/> (September 14, 2017) .
- 環境庁. 1979. “特定植物群落調査報告書 第 2 回自然環境保全基礎調査”.
<http://ci.nii.ac.jp/naid/10009663249/> (September 14, 2017) .
- 環境省. 2017. “環境省レッドリスト2017.” <https://ikilog.biodic.go.jp/Rdb/booklist>.

本日の内容

- 1 身延道とは？～甲府城下から身延山をたどる
- 2 広重「甲州日記」の世界
 - ① 旅中心おほえの発見
 - ② 広重甲州行の目的
- 3 最後にひとこと

1 身延道とは？



(1) 甲州道中からの分岐

「往還通り右之方当村分内百四拾貳間横九尺 道壱ヶ所是ハ駿州往還ニ御座候」(西青沼村明細帳)



(2) 身延道という名称



飯豊橋東詰題目塔

荒川：西條渡し

身
延
道

是よりかぢか沢迄四里
かぢか沢より舟道六里



飯豊橋西詰記念碑

古ノ西條渡しニシテ身延道中ノ要路タリ

○「荒川板橋（中略）右之橋九月懸、翌四月筈シ申候」（延享二年高畑村明細帳）

(3) 身延道とは？

1 村明細帳記載の名称

「駿州往還」～下石田村弘化5年

「駿州道」～河西村天保8年

「甲府より駿州江之往還西河内路・東河内路通り」～布施村享和2年

2 道標・石碑等

「身延道・身延道中・みのぶみち」

3 河内路 「甲斐国志」

「古時伝通ハ府中ヨリ三里半ニシテ市川大門宿（中略）慶長以後富士川ノ通船開ケテ便道ナレバ西郡鰍沢宿へ遞送ス」

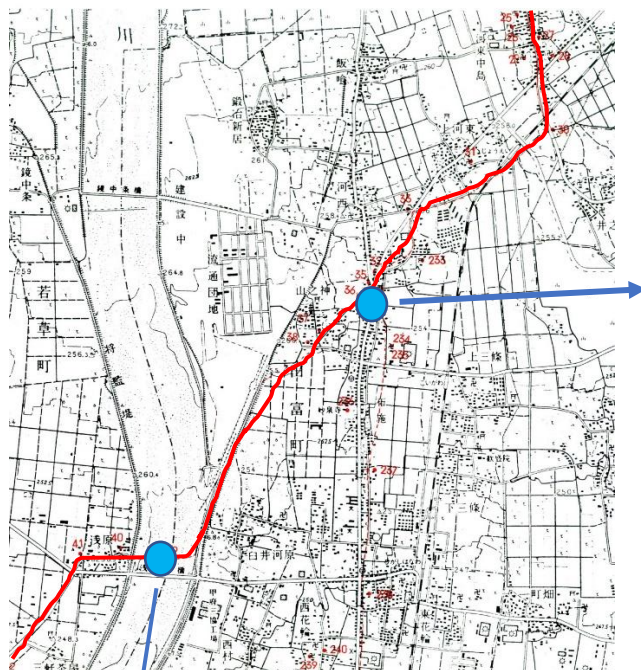
「鰍沢～両越渡（砥坂・岩崎）～切石～早河ノ横渡～下山～身延～南部～万沢～駿州穴原～東海道興津駅」

4 中世以降「河内路」 近世以降「駿州往還」が加わる。特に身延山参詣道として「身延道」が意識される

*道の規模

横一間三尺（下石田村明細帳、横二間・高二尺（河西村明細帳）、横二間（大田和村・浅原村明細帳）

(4) 辻屋（布施）の道標から浅原渡し



- 北東～ふちゅう
- 北～にらさき
- 南西～かじかざわ
- 南～いちかわ

浅原の渡し

「川幅二百七拾間余」

「冬春ハはし、夏秋ハ舟わたし候」（浅原村明細帳）



(5) 鰻沢河岸



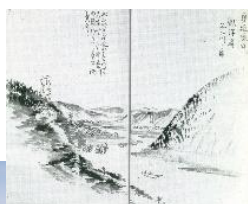
甲府代官所管轄お米蔵 『甲州道中商家高名録』より

舟の規模と運輸能力

- ・ 規模～長さ 7 間 2 尺（約 13m）、幅 60 尺（1.8m）、深さ 2 尺 8 寸（84cm）
- ・ 積荷～米の場合 32 俵積、船頭 4 人乗り ・ 運賃～32 俵積（615 文～799 文）
- ⇨ 返り荷として商人荷許可 ・ 身延参詣～16 人から 20 人乗り
- ・ 川下げ～御城米最優先、年平均 5～6 万俵 （享保～文化までの 90 年間：小野寺 1991）

(6) 広重スケッチ始まる

此邊より身延山までの間
左高山にして中不二川
の流ありて古今絶
景なり



身延道中
鯀澤驛
不二川之図



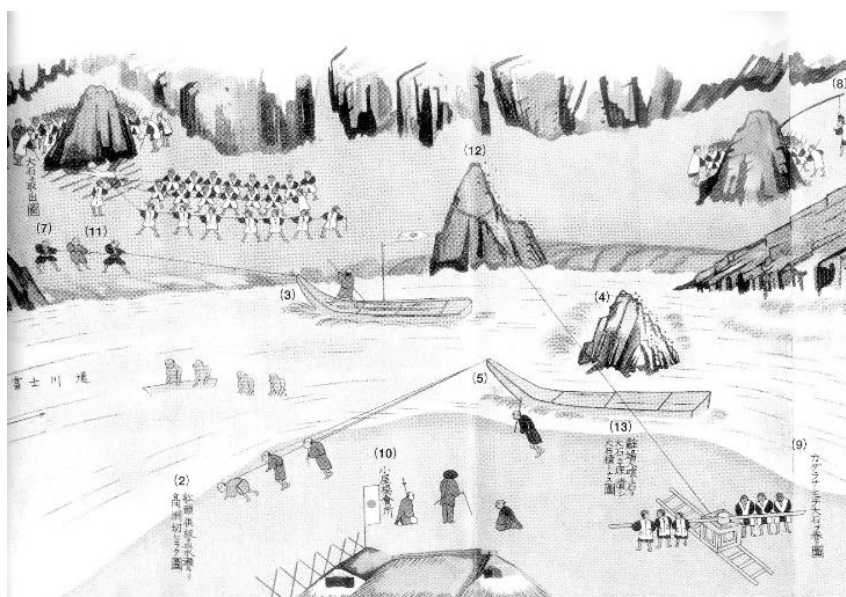
禹の瀬から鯀澤方面を望む



富士川の難所：天神ヶ滝の現状



切り取り痕のある大岩



天神ヶ滝の難所工事風景。江戸時
代の土木技術がわかる。

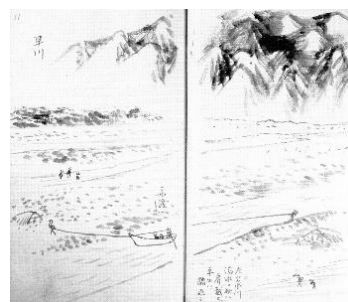
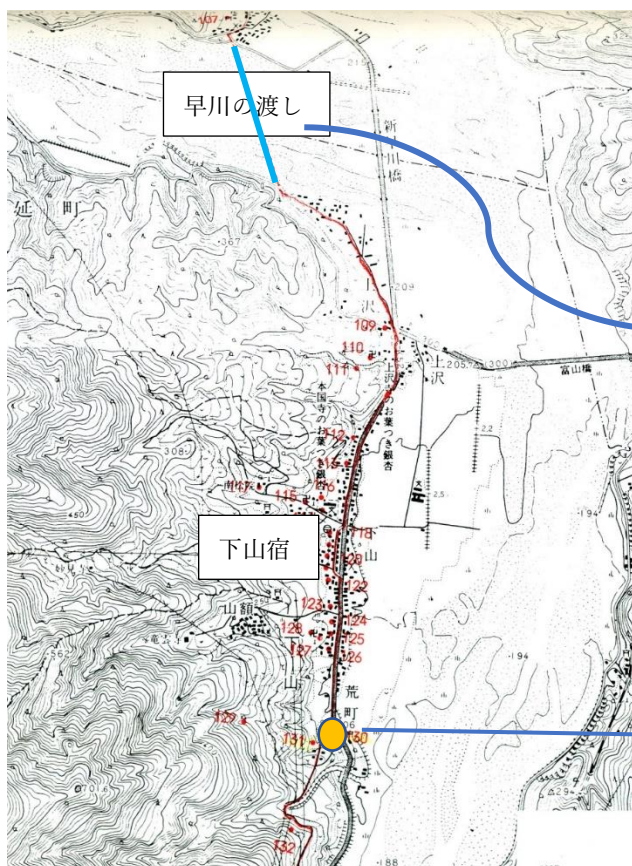
富士川天神滝難船除大石運搬図（文化14）『明治以前日本土木史』：山梨県教育委員会 2006『鯀沢河岸跡』Ⅲ より



切石宿付近の「洗濯石」があったとされる場所



屏風岩の風景



左有小川
満水ニ成ハ
肩越也
平日ハ
踏込ミ



宮原入り口道標

【早川渡しに関する記事】

- ・甲州道中記 「河原の巾着里有、常水は川巾三十間」
- ・甲斐国志 「冬春ハ橋ヲ架ス」
- ・飯富村明細帳 「早川常船壺艘（中略）船頭之義ハ当村より式人、下山村より式人宛出合申候（中略）舟賃錢之義ハ久遠寺より出札持候者ハ壺錢も取不申候、札無之者ハ水かさにより五錢より拾貳錢迄船頭ども取申候」
- ・飯富村明細帳（元文3） 「当村早川橋木壺本 長さ八間半 巾壺尺六寸 厚壺尺貳寸」
- ・下山村明細帳（文政11） 「早川橋木梅木壺本 長八間四尺 末口三尺廻リ」「十月八日長八間四尺木材より壺本、飯富村より壺本出し兩村ニ而掛ケ申候」

(7) 駿州往還との分岐



右身延山道 是ヨリ本堂迄
四十丁餘
左駿州往還明治二十一年
十月日

下山から身延山へ

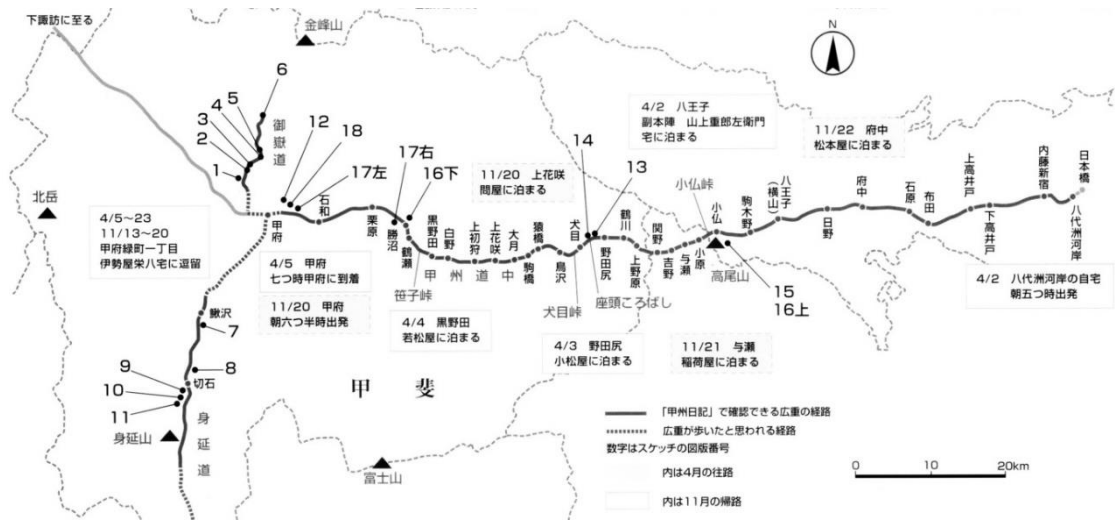


「甲斐国身延山七面山之図」とい
う作品がある。

『百年祭記念 広重名作展覧会出陳目録』

1957

2 広重「甲州日記」の世界



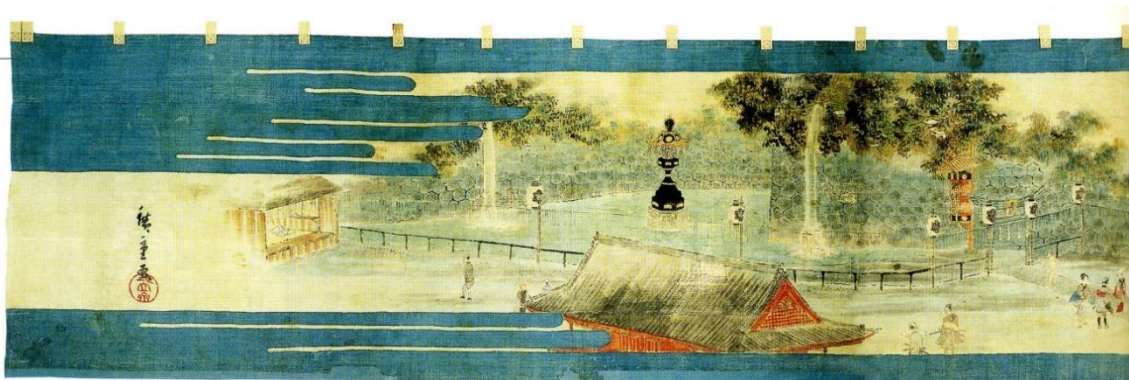
広重が歩いたコース（井澤英理子編『歌川広重の甲州日記と甲府道祖神祭調査研究報告書』2008 年より）

（1）甲州日記とは？

- ① 「天保丑とし卯月、日々の記、一立斎」 ～天保12年4月2日～23日の記録
＝江戸～甲府旅程、甲府滞在（関東大震災で焼失）
- ② 「旅中心おほえ」～スケッチ18枚+11月13日～22日の記録＝甲府滞在、江戸帰路

（2）甲府緑町一丁目から「幕絵」制作依頼

- 1 甲府へ下る（天保12年4月2日～5日）
- 2 甲府滞在～緑町伊勢屋栄八宅
- 3 屏風絵、襖絵、鍾馗図、肖像画、幕絵（10枚前後） 以上、4月の「日々の記」
- 4 幕絵書上げ、江戸へ戻る（11月13日～22日）「旅中心おほえ」



歌川広重 「東都名所 目黒不動之瀧」（部分）

井澤英理子編『歌川広重の甲州日記と甲府道祖神祭調査研究報告書』2008 年より

(3) 甲府での経過 (新津 2008「甲斐の道中案内と広重ルートの検証」より)

- 1 天保 12 年 4 月 2～5 日 甲州道中を下る
- 2 1 回目の甲府行 4 月 5 日から 5 月 or 6 月
- 3 この期間中に御岳道と身延道 4 月～5 月
- 4 江戸へいったん帰る 6 月頃 5 2 回目の甲府 10 月頃
- 6 幕絵完成 (10 枚程度か) 11 月 7 江戸へ帰る 11 月 20 日 甲府発

(4) 御嶽・身延行きの目的は？

幕絵制作の間を利用して御嶽および身延へ

- ・御嶽行き ①金櫻神社参詣 ②甲斐の山のデータ収集
- ・身延道行き ①身延山参詣 ②甲斐の川と舟のデータ収集

3 最後にひとこと

- ・未発見の画帳があるはず。
- ・そこには→①身延山・七面山のスケッチ
②金櫻神社の絵と御嶽道からの帰りの絵

写真で読み解く半世紀前の山梨

NPO 法人地域資料デジタル化研究会 中澤京子・小澤千寿子

1. デジ研アーカイブ

私たち NPO 法人地域資料デジタル化研究会（以下、デジ研と表記）は、過去の記憶を明日への希望と活力にしたいと考え、地域資料のデジタルアーカイブを制作しています。デジタルアーカイブとは保存電子資料と言い換えられます。図書・出版物、公文書、美術品・博物品・歴史資料等公共的な知的資産や個人が得た知識や経験などをデジタル化し、インターネット上で公開して、電子情報として共有し、利用する仕組みを指します。



図1 「甲斐之庫」



図2 写真アーカイブ

私たちが制作したアーカイブは「甲斐之庫（かいのくら）」（図1）というインターネット上の倉庫に保存し、公開しています。写真アーカイブ（図2）、道祖神の姿、どんど焼き等、これらは学校教育、社会教育、生涯学習の教材として、また単に楽しみにも、無償でご利用いただけます。

図3は、現在デジ研のHPで公開されているページの一例です。中央の写真は、昭和天皇の戦後第3回目の山梨ご訪問の様子を現在の県庁前、平和通り側から



図3 現在公開しているページ

撮影したものです。写真とともに、当時の時代背景や、写真から読み解いたり調査したりした内容を記述しています。

デジ研では、インターネットでは公開し

ていませんが、東日本大震災で被災した資料の救出・デジタル化と再活用への支援も行いました。

他にも県立文学館、甲州市の「わだつみ平和文庫」、北杜市の大泉金田一春彦記念図書館資料など文献資料の整理業務、音声資料のデジタル化を事業として行っています。

また、文化財の記録も行なっていて、大月の笹子追分人形の公演を記録し保存、更に山梨県の奈良田地方の方言を調査し記録する活動も行いました。

2. 昭和の写真アーカイブ

「甲斐之庫」の中の写真アーカイブでは、昭和30年代から40年代の記録を公開しています。これらの記録は、内田宏氏と中山梅三氏というお二方が撮った写真です。お二方について、ご紹介したいと思います。

内田宏氏は1923年（大正12年）生まれで、山梨県職員として農業改良普及事業に携わりました。そ

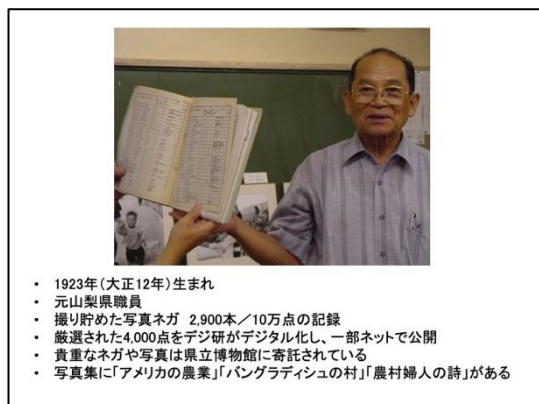


図 4 内田宏氏



図 5 内田氏の資料

の農業普及の記録と広報のために写真を撮り始め、公務のかたわら農村写真を撮り続けた方です。撮りためた写真のネガは2,900本、農家の日常や養蚕などの生業、年中行

事、祭礼、農業改善活動、災害復旧等、撮影した写真は十万点に及びます。2010年にデジ研が4,000点の写真資料をデジタル化、その一部をインターネットで公開しています。貴重なネガや写真は山梨県立博物館に寄託されました。写真集に「アメリカの農業」、「バングラデシュの村」、「農村婦人の詩」などが出版されています。(図4)

現在のようなデジタルカメラのない時代で、フィルムカメラで撮影した写真の記録は全てネガとプリントされた紙の記録です。内田氏の素晴らしいところは、膨大な量の写真をきちんと整理し管理していたことです(図5の右側写真)。写真には撮影年月・撮影場所・ジャンルが記録されている為、歴史・民俗資料としても価値のあるものになっています。この記録があったことで、私たちがアーカイブする際に基本的なデータを作成することができました。

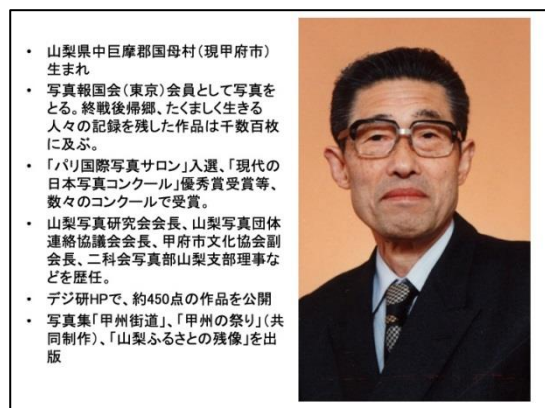


図 6 中山梅三氏

中山梅三氏は、大正4年4月26日山梨県中巨摩郡国母村上条(現在の甲府市)生まれです。戦争中は写真報国会会員として、出征兵士、留守家族等の慰問写真を撮り、戦後復興期は、貧しい生活の中ひたすら働いて生きる喜びを見つけようとした農村の人々の姿を写しました。22才の頃から写真コンテストに応募し始め、長年にわたり多数の賞を受けています。また山梨写真研究会会長、山梨写真団体連絡協議会会長などを歴任し、写真集「甲州街道」、「甲州の祭り」(共同制作)、「山梨ふるさとの残像」を出版しました。(図6)

3. 二枚の写真を読み解く

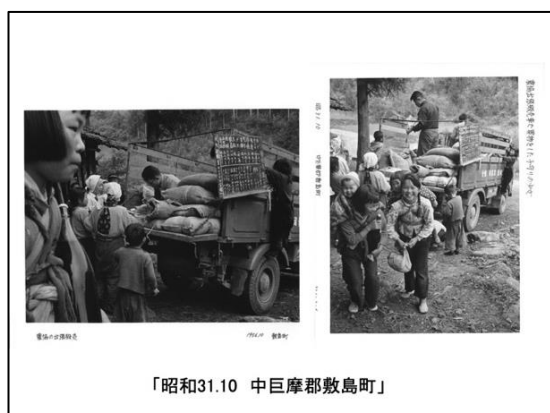


図 7 農協の出張販売の様子

ではここから、私たちがHP上に公開するまでにどのように写真を読み解いているかお話ししたいと思います。

今回は、昭和の生活を記録した写真を見ていきます。図7は内田宏氏が昭和31年に中巨摩郡敷島町で撮影したのですが、この2枚の写真は同じ場所を別のアングルで撮ったものです。小さくて見づらいかもしれませんが、プリントした写真の余白に、それぞれタイトルが記されています。左が「農協の出張販売」、右が「農協出張販売車で買物をした子守の少女」。また両方の写真に「昭和31.10 中巨摩

郡敷島町」とあります。このように内田氏の写真については、写真と一緒に基本的な情報が書き記されているものが多くあります。

では 1956 年（昭和 31 年）とはどんな時代だったのでしょうか。「もはや戦後ではない」この年の経済白書にはこの言葉が登場し、日本経済の戦後復興期は終わったとの判断が示されました。政治では石橋湛山内閣が成立、石原裕次郎さんが主演した映画「太陽の季節」が公開されたのもこの年です。世の中が急激に発展し、華やかな時代の訪れを思わせますが、まだまだ素朴でみんなが力を合わせて生活している、そんな山梨の農村の様子を図 7 の写真から窺うことができます。



図 8 吠（かます）



図 9 風呂敷



図 10 一升瓶

1 つ目の特徴として、この時代の子供たちが赤ちゃんを背負っている写真が数多くあります。兄弟姉妹が多かった時代、小学校に入る頃には子守は子供の大切な役目でした。2 つ目の特徴は、女の子はおかっぱかお下げ髪で、大抵の男の子は坊主頭です。3 つ目の特徴は、大人の女性は割烹着にもんぺ、ほっかむりというスタイルです。

図 7 の右の写真を拡大したのが図 8 です。荷台に乗せてある袋のようなものは籐（むしろ）を二つ折りにして縫い合わせた吠（かます）という農業資材です。広辞苑によると、籐（むしろ）は藎草（いぐさ）・蒲（がま）・藁（わら）・竹などで編んだ敷物の総称です。主に敷物として用いられますが、特に穀類を天日で干すのに欠かせないものとされていた。図 8 の左の写真のように、吠は穀物などを貯蔵、運搬するのに使われました。

図 9 で、可愛らしい子供が手にしているのは、風呂敷です。物を包む布としての起源は奈良時代に遡るようですが、広辞苑によると、風呂に入る時には衣類を包んでおき、湯からあがった時には足を拭うのに用いた布、とあります。何度でも何にでも使え、持ち運びに便利な包装材である風呂敷は、大量消費社会の形成で姿を消しつつありました。しかし、ここ数年レジ袋問題に歯止めをかけているエコバックよりずっと昔からあるリユース製品の先駆けということで、近年ではまたこの風呂敷が見直されているようです。

図 10 の女の子が抱えているのが、現代でも使用されている一升瓶です。ガラス製であることから密閉性が高く、多彩な飲料や調味料の容器として用いられ、日本国内では様々なところで利用されてきました。明治時代、日本酒向けに製造が始まったとされているので歴史は古いです。規格化されていることから、ラベルの剥離と貼付のみで内容物の変更に対処できる点で汎用性も高く、現在でも同一規格で普及しているのも、デポジット制に相当する再利用・流通体制が確立されています。こちらも代表的なリユース製品です。

以上いくつか道具を見てきましたが、私たちの生活の中から消えつつあるものもあります。でも、国土が狭く資源が少ない日本では、古くから物を大事にする文化がありましたし、物は最初から再利用を前提とされていました。私たちの生活は便利になりましたが、この時代に学ぶことは沢山ありそ



図 11 単価表

新聞購読料 330 円、映画館 140 円だったそうです。

移動販売というのは、現代社会でも買い物をするのに不便な地域の人々にとってとても便利なシステムですが、当時も本当に様々なものが売られています。

上記の価格表の中で、現在見かけなくなったものに、「合成酒」があります。合成酒とは、アルコールにブドウ糖・有機酸・アミノ酸などを加えて、清酒に似た風味を持つように造ったお酒のことで、合成清酒のことです。昔は、日常的に飲む場合この合成酒、お祝い事などがある場合に清酒を飲むというように、生活の中で使い分けていたようです。

また「大和」という表記があり、恐らく「大和煮」のことだと思いますが、辞書などには牛肉などを醤油・砂糖・生姜などで煮たものと書かれています。現在流通しているものは、牛肉の大和煮のようですが、大変味付けが濃く素材の味を消してしまうため、クセの強い肉や質の悪い肉であっても素材として使うことができる料理方法のようです。当時は捕鯨が盛んだったことから、昭和 30 年代は鯨肉が大和煮として売られていました。

2 枚の写真から、村の暮らしの様々なことが見えてくるのがお分かりいただけたと思います。

私たちは写真を読み解く際に、いろいろなものから情報を得てきます。本や参考資料、当時のことを知る人から聞く、現地に行ってみるなど、方法は様々です。また今回は生活を記録した写真を読み解きましたが、例えば風景の写真から場所を特定するのに、山梨のように四方八方を山で囲まれた土地では、山の形、地形を見ることが、写真を理解するのに役に立ちます。その際に、ウィキペディアや Google マップなどのインターネット情報は非常に便利で、活用しています。

4. 戦後の山梨における農業改良の変遷を写真で見る



図 12 田植え時

ここからは、「2. 昭和の写真アーカイブ」でご紹介した写真の作者・内田宏氏と中山梅三氏の写真を通して、戦後の山梨における農業の改良の変遷をご覧ください。

図12は、人の手による田植えの様子です。

昭和20年、第二次世界大戦中の人手不足と肥料不足でお米がとれず、山林伐採によって山は荒廃していました。その上に、疎開していた人や復員して来た人が戻り、山梨県の人口は前年より20万人増加しました。不幸なことに台風にまで襲われ、土石流が発生、橋や田畑が流出し、身延線は寸断されました。

終戦直後の農政の最大の課題は飢餓からの脱出でしたが、手による田植えは効率が良くありませんでした。



図 13 田鋤き



図 14 農改良普及職員大会



図 15 トラクターによる耕耘実演

大きな農機具を直輸入したもので、山梨県のように傾斜地が多く、耕作地の1枚1枚が狭く分散している土地には不向きでした。工業技術の発展で、この土地に適した農機具が製造されるようになりました。



図 16 田植機実演展示

くなりました。機械化のお陰で一人で出来る仕事の範囲が広がりました。

図16は、田植機の実演です。従来の農業機械は欧米の広大な農場で使用している



図 17 土壌検定をする改良普及員



図 18 農事メモを放送する改良普及員

図17は、土壌検定をする農業改良普及員です。農業改良普及員は土壌検定器を農家巡回に持参し、検定の必要がありそうな田畑で働いている人がいると、目

の前で土壌検定を行い、検定結果を見ながら土壌管理や肥料の施し方を説明しました。この指導により、農家は作物の収穫量を上げ、収入を増やすことができました。

図18は、農事メモを放送する農業改良普及員です。農業に役立つ情報を有線放送で伝達しています。村のラジオ放送局として人々の心をつなぐ強い力となりました。



図 19 桑畑からぶどう園へ

明治以来、米麦の生産と養蚕に依存してきた山梨でしたが、日本経済発展期になると京浜商工業地帯に隣接するという土地の利を生かし、都会に新鮮な農作物を供給する近郊農業が推し進められました。

図19は、求められる農作物の変化によって、一面に広がっていた桑畑が一斉にぶどう園に変わっていく様子を。まだ引き抜かれていない桑の木が並んでいます。

図20は、温室でぶどうを栽培する取り組みが始まったことを伝えています。農民は農業改良普及員と共に優れた新技術を学び、生産性の高い合理的な経営を目指しました。



図 20 温室ブドウ栽培の学習



図 21 石垣いちごの床作り

図21は、いちご栽培の改良の様子です。いちごは石垣に植えると地面の泥の影響を受けず、太陽の温度と光によって美味しいいちごが早くできます。

出荷の時期を早めて市場価値を高める工夫です。食の変化に合わせて、農家の収入を大きく増やす良質で希少価値の高い果物、野菜、卵、乳製品が多く生産されるようになりました。



図 22 観光農園



図 23 モモ共同選果場

図22では、ぶどう狩りに観光客を呼び込んでいます。農家が現金収入を得るために観光農園にも取り組んだ様子が分かります。

図23は、農作物の市場出荷の改良の様子です。一定の品質を守るため機械化された共同選果場が作られ、共同販売体制が確立されました。

農業改良と同時に農家の生活改良の取り組みも進められていました。



図 24 生活改良普及員の家庭訪問

農家の生活にとって水は特に重要でした。当時は自宅の井戸から水が汲めれば最高で、多くは川の水を汲んで運び、水槽に貯えて生活用水としていました。

図24は、生活改良普及員の活動の様子です。農家の主婦は、洗濯を地面に置いたたらいで行い、腰を痛めることがありました。洗濯台を作って立って洗濯をしたら楽ですよ、と生活改良普及員が薦めています。

毎日の生活の中で当たり前と思ってしている行動でも、見方を変えれば上手な暮らし方ができます。女性が働きやすくなるヒントを伝えていきました。



図 25 古い台所



図 26 改良された農家のかまど

図25は、台所の古いかまどです。昭和30年代まで農家の台所には煙が充満していました。

図26は、煙突がつけられ、煙のない台所で立って炊事ができるよ

うになった改良されたかまどです。これは、農業生産と生活は対等関係にあり、生活向上が生産活動の向上に結びつくという考えに基づいています。

山梨県では先ず現在の笛吹市石和町の富士見村で台所や風呂場の改善が始まりました。同村では、昭和24年秋までに5戸の農家の台所や風呂場が改善され、現地で行われた見学会には学者が1年で8,800人も訪れたそうです。昭和26年には農林大臣賞を受けました。その後県が財政的支援を行い、山梨県は生活改善において先進県となっていきます。



図 27 共同炊事



図 28 共同炊事 パン作り

図27は、共同で作った料理がそれぞれの家の鍋に入れられ、棚に並ぶ様子です。少しでも効率よく生活するために、共同炊事というシステムで助け合いました。

図28は、共同炊事でパンを作っているところです。米食ばかりでなく、パン食の方が消化が良く肉



図 29 キッチンカー

体労働をするには適しているとパンが薦められました。

図 29 は、動く台所と呼ばれたキッチンカーです。食生活の改善を図るため、栄養バランスのとれた料理、栄養価の高い料理を栄養士が出向いて実演指導していました。キッチンカーに「油をしっかりととりましょう」という標語が掲げられている写真もあります。時代は変わるものです。

図30は、県の広報課の車「ひかり」が「新笹子隧道」と書かれたトンネルから出て来るところです。



図 30 山梨県広報課の車



図 31 国道二十号線遠景

山梨県が大消費地に隣接しながらも経済発展が停滞していた理由の1つに、四方を急峻な山で囲まれているという地理的悪条件がありました。

県は昭和28年、「富める山梨」

実現のため山梨―東京間の時間的距離を短縮する計画を立て、昭和33年に新笹子隧道が完成しました。御坂越えに比べて1時間40分、旧笹子隧道を通る道に比べて40分の短縮でした。

図31は、新笹子隧道の開通に伴い建設された首都圏へ続く道です。新笹子隧道を中心としたこの国道二十号線の全面的改修は、高度経済成長時代に間に合い、単線の中央線と不完全な道路に頼っていた山梨の良質で希少価値の高い産物を品質の良い状態で運び、観光客を増やしました。新笹子隧道開通の日は、山梨が現在の「果樹王国山梨」になる始まりの日であり、今や海外にも輸出される高品質な県産果物が世界へ届く第一歩を踏み出した日でもありました。

- ・内田 宏氏 「よみがえる戦後山梨の記憶」
(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/yomiyama/index.html>)
- ・中山梅三氏 「みんなの山梨アルバム」
(<https://www.mmdb.net/usr/digiken/Yamanashi-Album/>)

5. 「今」を記録する

これまでは、過去の記録をご覧いただきましたが、ここからは皆様にもアーカイブをお作りいたきたく、その制作ポイントについてお話しします。

「1. デジ研アーカイブ」でデジタル・アーカイブについてご説明しました。従来のマスメディアでは一斉に同じ情報が届けられてきましたが、今やインターネットの時代になり、誰でも欲しい情報を

自ら探し出して得られるようになりました。例えば、ある特定の場所でしか知られていなかった資料も地域に根ざした個人の資料も、デジタルアーカイブで公開して広く利用されれば、その価値が認識されることに繋がり、ひいては地域の活性化や観光の促進につながると考えられています。身の周りの生活の記録が半世紀後には「昔の人々の文化」となることを、数十年前の資料をデジタル化していて感じています。

「50年に一度の災害」とか「平成から年号が変わる時」など、特別な時でなくて良いのです。これは貴重だ、というほどではないけれども、今を生きている自分たちの普通の毎日を撮影して残しましょう。現在では身近ないつも持って歩けるスマートフォン、デジタルカメラなどでも、未来に残すのに十分な画像が撮影できます。



図 32 なんという植物？



図 33 情報を残す

写真を撮る際のポイントは、いつどこでどんな状況で撮影したものかなど、いわゆる 5W1H を念頭に置いて、被写体への手掛かりも入れると良いです。撮影するのは私にとっての“今＝普通の毎日”でも、その光景を知らない人が数十年後に見た時に“いつ・どんな状況で”が判るように、写真を理解する手掛かりを残しましょう。

図 32・図 33 は 2018 年春、スマートフォンで撮った写真です。

図 32 の写真が桜だということは判りますか？葉の形からこの植物は大きめの桜だと判りましたが、花はオフホワイトのような白で一重の大輪でした。しかも他の桜より少し遅く咲いていました。この写真への情報として、季節は春なのですが、花の名前や場所など情報をプラスしたいです。近くの建物とか遠くの山とか入れて写すと、写真への手掛かりを残すことができます。

図 33 は 2 枚目の写真です。少し引いて撮影したもので、下の立札には、「花の名前は太白桜（タイハクザクラ）、花びらが桜の中で最も大きく、5cm 余りの大輪で純白。日本では一度絶滅した品種で、1932 年にイギリスから逆輸入された植物」と記述されています。更に、桜の向こうに駐車場のラインが写っているのも、場所は広い施設の中ということは想像できますか？ここはアルプス通り沿いの甲斐市にある Kai・遊・パークです。

＜太白桜の歴史＞

この植物を「タイハクザクラ」の名前を手掛かりに調べてみました。すると山梨県内に既に明治時代からあったものだということが分かりました。

明治後期、現在の甲府市大津町から中央市乙黒にかけての笛吹川の土手沿いに咲き誇っていて、たくさんの人が花見に来て、その地名から「乙黒桜」と言われて親しまれていたそうです。その後河川の改修に伴い、その桜は姿を消してしまいました。ところが、最近甲府市北口の甲府市歴史公園に苗木が寄贈されて、2011 年からは「太白桜まつり」が「よっちゃばれ広場」で行われるほどに時期には咲き誇っているそうです。

このように、被写体への手掛かりは、アップにしてみたり、少し下がって写してみたりすると残せるかもしれません。周囲の様子を観察して撮影しましょう。

花の美しさにアップで撮った私ですが、何という花だろうと撮った 2 枚目の写真がなければ「タイハ

クザクラ」の歴史にたどり着くことはなかったと思います。

さて、ここまでは写真に付けてほしい情報の話でしたが、これから写真を撮影する時の画質について少し話をさせていただきます。



図 34 細部もわかる画像

「3. 二枚の写真を読み解く」でご覧いただいた移動販売車の写真（図 34）では販売物品のサンマが“二十五円”であるのが読めるほどすみずみのことまで分かりました。デジ研では細部まで分かる画質で保存して公開しているので、このようなことが可能なのです。

スマートフォンやデジタルカメラでは「解像度」を設定できます。その設定画面では例えば 2Mとか 5Mとか書かれているのですが、この数字が大きくなるほど細部も分かる写真が撮れるように設定できるのです。現在のスマートフォンやデジタルカメラは性能が良くなり、精密な写真が撮れるようになりました。

デジ研のホームページでは昭和30年代の内田氏・中山氏の写真を、少し大きいサイズを「Lサイズ」から、細部が確認できる画像を「オリジナル」からご覧いただけます。

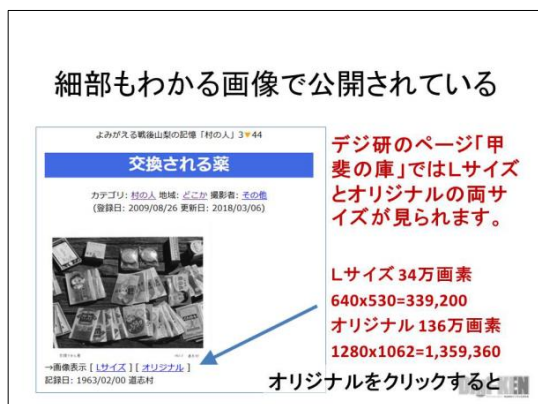


図 35 画像サイズ選択画面



図 36 拡大表示された画像

図35で、下の交換される薬というページのオリジナルをクリックすると、図36のようにより大きく表示されます。

拡大された図36では、薬の名前までが鮮明に見えます。これ

らの薬から当時暮らしの中で何の病気に困っていたか何を大切にしていたか、よく分かります。風邪を引いた、子供が病気になった時のために、という意識が垣間見えます。すみずみまで見える写真を残したいと思える写真です。

スマートフォンやデジタルカメラのおかげで手軽に写真が撮れるようになりましたが、撮った写真がそのままになってしまいがちです。いずれの写真もあまりためないうちに整理し、「あれ？これ何の写真だったけ？」ということがないようにしておくことが大切です。

方法としてデジタルデータの保存とプリントアウトして保存しておくとの良いです。

A) デジタルデータで保存

私は普段からパソコンを使っているのですが、撮った写真をスマートフォンやデジタルカメラからパソコンに取込んで、フォルダという所に、日付や場所の名前を付けて保存していま



図 37 デジタルデータで保存

す。パソコンではフォルダに好きな名前を付けて、その中に写真をまとめておくことができ、お薦めです。

図37の2枚の写真は「20080928稲刈り」というフォルダに保存してありました。数字は日付でその後ろに何の写真かが分かるフォルダ名をつけて保存してありました。つまり2008年9月28日に、家の田で稲刈り作業をした時の写真です。フォルダ名に場所も入れておく良かったと反省しています。この写真には場所の手掛かりが全くないからです。

B) 印刷して保存

写真をプリントアウトしておくのも一つの方法です。これは見てほしいというデジタルデータを印刷して残すのです。そして、写真の余白にタイトル・撮影年月日・撮影場所をメモしましょう。図38のプリントアウトされた内田氏の写真では、余白にメモが残されていたお陰で、それを手掛かりに写真に説明をつけることができました。

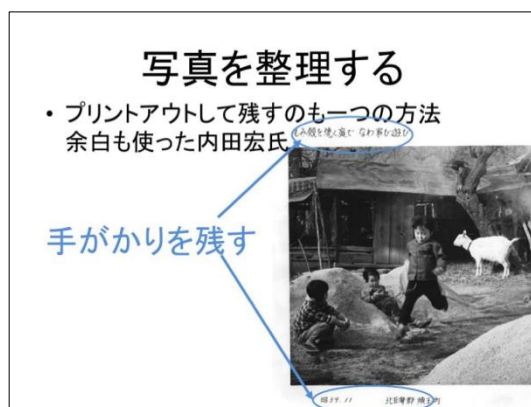


図 38 プリントアウトして保存

内田氏・中山氏の写真は、昭和という時代の人々が懸命に生きていたことを、現代の子供たちに示す証拠写真になっています。同じように、私達が撮った写真も山梨の歴史です。今撮った写真が、平成という時代の山梨の証拠写真になって

いくかもしれません。

大切なデータです。これは見てほしいという写真は、整理・保存したり、プリントアウトしたりして未来の誰かと共有しましょう。

私たちがこのような地域資料のデジタル化という活動をしている理由は、地域の資料は住民が保存しなければ誰も保存してくれない、地域を知っている住民が行うからこそ質の高いデジタル・アーカイブができると考えるからです。そして、作業を通じて自分自身が新しい発見をすることはとても楽しいことだということもお伝えしたいと思います。皆様のご経験や記録してきた資料も、未来の歴史、大切な共有財産としてデジタル化して残すことをお薦めします。

共同発表者・執筆者 井尻俊之 堀水清美

参考資料

内田宏「やまなし農業よもやま話」 ザやまなし 山梨日日新聞社 1997年11月～
山梨県 農業改良普及事業10年の歩み 昭和34年
有泉貞夫 山梨県の百年 県民百年史19 2003年

「柳沢吉保と甲府城一城内に新設された能舞台の姿とは一」

甲府城研究会 西海 真紀

はじめに

16世紀末、武田勝頼滅亡後の甲斐国にあらたに築かれた甲府城は、豊臣政権のもと浅野長政・幸長により完成したと考えられている。天正18（1593）年に北条氏旧領に移された徳川家康に対する最前線の城のひとつであったが、江戸時代に入ってから甲斐国統治の要として、約100年もの間将軍の子弟が城主となる特別な城であった。よって、実際には徳川家一門の城主が居住することはなく、城代や城番により管理されていた。しかし、宝永元（1704）年将軍徳川綱吉の側近として活躍した柳沢吉保が大名として初めて城主となると、大名の居城としての機能がととのえられることとなった。その後、享保9（1724）年に将軍徳川吉宗により息子吉里が大和郡山へ移封されるが、以後甲府城は幕府直轄の城として約140年間甲府勤番により守衛され、幕末をむかえた。

明治時代にはいと、城跡は県営の勸業試験場として利用されることとなった。明治9年までには番所と蔵などごく限られた一部の建物をのぞき、城内の建物はほぼすべてが取り壊され、殖産興業政策の体現の場として一面に植物が植栽された。その後は順次解体され市街地となり、現在のはかつての三分の一程度が城跡として保存され姿をとどめている。

近年、発掘調査や史料調査の成果に基づき城内の失われた建物が少しずつ復元され、往時の姿を取り戻しつつある甲府城。本稿では、甲府城の失われた姿にせまるために、城の姿がもっとも整えられた柳沢吉保期の甲府城を中心にあつかう。後の時代に「御城内御普請美濃守殿御代より御郭内外御普請有といへ共、別て隣国他国より馳集る諸職人美を尽し、御城内に八数の館を建御楽屋、比沙門堂、稲荷宮、学文所、公文所、政所、台所、贄殿、局部屋、四阿屋、御書院に続て礼堂、持仏堂休所、櫓に至迄中々筆頭に尽かたく……数万軒の御家中、堅小路、横小路、棟々棟門に門を並へ、作り並へし有様は是そ甲府の花盛り、時を得たりと見へにけり」（『兜^{かい}口雑記』、寛保年間頃成立）とうたわれた柳沢期の甲府城。美濃守は将軍徳川綱吉の側用人としてその名を知られた柳沢吉保である。

柳沢氏の甲斐国領有期間は約20年と短いものの、残された史料は比較的多い。本稿では柳沢期の城内の建造物についてまず基礎的な整理をおこない、近年あらたに確認された史料から得られた情報を加えながら、これまであまり論じられてこなかった城内の建物の具体的な利用方法についてささやかな私見を述べたいと思う。

1 甲府城内の諸施設の構成

（1）基本的な建物配置

江戸時代、城内の建物の配置状況については何度か変更がみられる。絵図や文献史料から寛文4年の甲府徳川家による改修、宝永2年以降の柳沢家による改修が大きな改修としてあげられる。築城から半世紀を経た寛文年間の改修では、甲府徳川家は幕府より2万両を拝領して改修をおこなったが、関連すると思われる絵図が数枚伝わるのみであり、具体

的な改修の内容よくわかっていない。しかしながら、2 回目の大改修である宝永年間の改修については比較的多くの史料が残されているのでここでその前後の城内の様子を整理してみたい。

まず、まず柳沢吉保の公用日記である「樂只堂年録」に綴じ込まれている甲府城絵図に書き込まれた情報を模式図であらわしたが図 1 である。この絵図は宝永 2 年 9 月 26 日条の部分に綴じ込まれている。絵図内にあらわされた文言によれば、甲府城内城は本丸・天守曲輪・稲荷曲輪・清水曲輪・屋形曲輪・数寄屋曲輪・樂屋曲輪・鍛冶曲輪などで構成されていたことがわかる。なお、現在は城の西側部分は市街地となり本丸を中心とした東側部分（稲荷曲輪、数寄屋曲輪、鍛冶曲輪など）が城の姿をとどめるのみである。

主要な施設について述べると、まず櫓は、本丸、稲荷曲輪、二ノ丸、数寄屋曲輪、清水曲輪の 5 棟が描かれる（具体的な位置は図 1 を参照）。門は追手（大手）門・山手門・柳門が内城に入るための大きな門で、このほかに鉄門・銅門・内松陰門・梅林門・竹林門など多数の門があり、付近に番所がもうけられていた。また、蔵は武具蔵・煙硝蔵・米蔵・金蔵などがあつた。そして、城主の居館など書院づくりのいわゆる御殿は、屋形曲輪・樂屋曲輪に柳沢氏により新設された。これ以外に各曲輪に井戸があつた。

これらの情報をもとに主要な施設は表 1 にまとめたが、まず城内を戦時の備えとしての収納施設として整理してみると、備蓄米など食料は鍛冶曲輪、武具は天守曲輪、火薬（焰硝）は稲荷曲輪、武芸の鍛錬のための施設（弓場、馬場）は清水曲輪におかれていたことがわかる。また、藩主の居住施設は屋形曲輪に、もっとも重要な儀礼施設は樂屋曲輪におかれた。

ここに文献史料からわかる情報を追加すると、「樂只堂年録」宝永 2 年 9 月 26 日条には、この絵図に対応する記録があり、「甲府城能内外所々の名を改む」「或ハ元の名を用ひ或ハ新構ふ名つくるもあり」の文言から、城内の大きな改修とともに諸施設の名称が柳沢氏により一部あらためられたこと、新たにできたものには新しくつけられたがわかる（表 2—①を参照）。これにより、通常絵図には記されないことが多い個々の施設の名称を詳しく知ることができるのだが、興味深いことにここでは改名前の名前もともに記されているので、柳沢以前の諸施設の名称をすることができるのである。たとえば、それまでは「南門」とよばれた本丸の南側に位置する門は「鉄門」、同じく本丸の西門西側に位置する「西門」は「銅門」に改称されたことなどがわかるが、このほか柳沢氏によりあらたに名付けられた「松陰門」「梅林門」「清水曲輪」「樂屋曲輪」などの名称をみていくと、城内の曲輪や建物などの諸施設が従前より美しい名前に変更されたことがわかるのである。

さて、柳沢家は 100 年間城主が居住することがなかった甲府城を、入部に当たりどのように整備したのであろうか。つぎに、城内の改修について柳沢氏から幕府に伺いをたてた絵図、文献史料を確認すると、たとえば城内の孕んだ石垣の補修をしたり（稲荷曲輪）、必要な部分は石垣を高くしたり（樂屋曲輪内の石垣）、あらたに石垣に変えたり、不要な部分は取り払ったりしている（追手門と山ノ手門の手前にある喰い違いの石垣）（表 2—①を

参照)。また、用途はよくわかっていないが、新規に堀をとりつけた「花畑」も内城北東に設けられた。これ以外にも、城下にあらたに見付を新設したり、堀をさらったり防御の機能を高めている。なお、柳沢吉保は城内だけでなく城下の町名も変更している（表1—①）

以上のように、先祖の地に錦をかざった城主柳沢吉保により城内および城下は整備され、城内には美しい建物が立ち並んだ。築城から100年、老朽化していた城内は一新され、あらためて城の威容がととのえられたのである。

ところで、柳沢吉保は幕府の中樞に身を置き、実際には甲府城に入ることはなかったが、あらたに設けられた藩主の居住施設と儀礼施設はどのような建物だったのだろうか。図1にはくわしく表していないが、原図とした柳沢文庫蔵「楽只堂年録」所収173巻絵図には、その平面プランが詳細に描かれているので、次章では、とくに柳沢氏による新設された藩主の居館（屋形曲輪御殿）、儀礼の場として使用された殿舎（楽屋曲輪御殿）についてこの絵図をもとに基礎的な整理をおこない、そこにあらたにわかってきたその他の史料の情報を照らし合わせながら、城内の建物利用の実態を可能な限り考察してみたいと思う。

2 甲府城の殿舎建築

（1）屋形曲輪（図2を参照）

屋形曲輪に描かれたこの建物は、藩主の居館である。よく見てみると、色分けがなされている。薄茶色が濡れ縁など板敷の部分で、おそらく建具の外にでている部分とおもわれ、桃色は建物内部と考えられる。各部屋に記された文字をみていくと、まずこの建物の中心といえるのが上の間（①）で、藩主の居室である。この居間廻りには、次の間などが附属し、台子の間（⑥）では藩主や客人への湯茶の用意などがなされたと思われる。また、すぐとなりには湯殿や揚場があり（④⑤）、建物の奥には別の湯殿と揚場があることから、こちらが藩主専用の風呂と考えられる。奥のものは藩主の夫人などが使用したものではなかろうか（②③）。⑩の納戸は藩主の装束等を保管していたところかもしれない。これより西側は台所である。かまどが描かれ、「膳立」の文字が見られることから（⑬）、藩主へ供される食事がつくられたのであろう。また、これらの南側には物頭のつめた番所があるので、ここが建物全体の入り口と考えられる。このほか祐筆部屋（⑭）など諸役人部屋があったり、入り口付近には客座敷（⑰）も描かれる。

次に重要な施設といえるのが⑭の藩主の寝所である。徳川将軍の居城である江戸城本丸御殿では、建物は表（政庁）、中奥（将軍の居間廻り兼事務所）、大奥（将軍の夫人など家族のすまい）の三つで構成されている。この場所は江戸城でいえば大奥にあたるところで、寝所の隣には居間と、女性が使用する化粧の間などがあった。西側に目を移すとこれ以外に最も北には「長局」（⑮）とあるので、ここではたらく女性たちが与えられていた部屋（宿所）がならんでいたことがわかる。またその南は湯殿（⑯）があるので、寝所の隣の湯殿をつかわない女性たちはここを使用したのであろう。なお、この近くにかまどが描かれている。また⑰の「モノヌイ所」とは、物縫所で藩主やその家族の衣服の調製をしたところであろうか。

こうしてみると、屋形曲輪御殿は北側がいわゆる女性たちのいる奥の空間であり藩

主寝所および奥女中たちの詰所、中央が藩主の居間廻りで、南側が役人の事務室となっておりいたことがわかる。ここであらためて建物の外側に目を移すと、建物の外に塀が描かれ、南と北に仕切られていることがわかる。塀の北側はいわゆる奥（江戸城でいう大奥）で、南側は江戸城でいうところの中奥（藩主の居間廻りと事務所）のような空間になっていたことがわかるのである。なお、両者は塀で仕切られたうえ、行き来することのできる廊下は2か所しか描かれていないので、やはり往来は管理されていたのではなかろうか。

（2）楽屋曲輪（図3を参照）

楽屋曲輪に描かれたひととき大きなこの建物は、儀礼の場であり政庁である。この建物の正面入り口は東側の石畳と式台が描かれている部分なので、藩主や客人はここから出入りしたと思われる。建物をはいるとまず番所があり、左へすすむと大きな広間へとつづいていた。建物の入り口から最も奥にあたり、南に面して光が入る部屋には大きな儀礼空間がもうけられていた。ここが藩主との対面などをおこなうメインの儀礼の場で、「上段」「下段」の文字があることから①②、視覚的な効果をねらって部屋と部屋の間には高低差が設けられ、藩主と対面する空間として格式が高められていたことがわかる。また上段の間には、床の間や納戸構③も描かれる。そしてそのすぐ北側には藩主の休憩所兼執務室と考えられるである「休息」の間が設けられ⑥、次の間や牡丹の間や竹の間といった部屋がつらなっていた⑦⑧⑨⑩。建物入り口から休息の間へ至るの空間には、役人の執務室がならんでいる。そして、そこから北側に目を移すと大きな台所⑪⑫⑬⑭⑮⑯と食材や食器など諸道具の保管場所があるので⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖、北側半分は儀礼の場を支えるバックヤードといっていいたいだろう。

また、先述の儀礼空間の南側にはすこし離れて能舞台が設けられている㉗。絵図には、舞台とともに鏡の間⑳㉘、装束の間㉙、橋がかり㉚がえがかれているので、一般的能舞台の形式をそなえていたことがわかる。そして、能舞台には上楽屋㉛、下楽屋㉜という大きな楽屋が附属していた。また、舞台の正面は楽屋曲輪の上段の間、下段の間方向に向いているので、楽屋曲輪御殿でもっとも格式の高いこれらの部屋が能を拝見する際の「見所」の中心として設定されていたことがわかる。

以上のように、楽屋曲輪御殿は南側がもっとも重要な儀礼の場であり、中央部分に藩主の居室と役人事務室、北側に儀礼を支えるバックヤードのスペースがあった。また、甲府城の楽屋曲輪の御殿は上段、下段の間を有し、能舞台もそなえた格式ある空間であった。この御殿は、江戸城本丸御殿でいうところの「表」の空間として位置づけられよう。

（3）城内建物利用の実態～藩主初入国の事例から

さて、最後にこれまで述べてきた城内の建物が実際にどのように使用され機能していたのか、文献史料をもとにすこしひもといてみたいと思う。

まず、実際に甲府城に居住した藩主柳沢吉里（柳沢吉保の嫡子）の公用記録である「福寿堂年録」に記された藩主初入国の際の記録から、城内の建物利用の様子がうかがえる部分をひろってみたい。

「福寿堂年録」によれば、柳沢吉里が初めて甲斐へ入国し甲府城に入ったのは宝永7年5月5日である（表3—⑥参照）。この日、吉里はまず城内に入ると、まず楽屋曲輪御殿に

入った。楽屋曲輪であるから、追手門あるいは柳門から内城に入ったと思われるが、御殿へは家老の案内で入り、そのまま儀礼の場へおもむくのではなく、まず休息の間に入った。

「休息」の名は江戸城でも將軍の使用する部屋にみられる名で、楽屋曲輪御殿のなかでの藩主の休憩所（居室）執務室として使用されていることがわかる。そののち衣服をあらためてから、下段の間へ入ったとあるので、休息の間をでて絵図にみられる休息の間と上段の間を結ぶ廊下で移動し、納戸構えから入ったと考えるのが自然であろう。この位置に休息の間が設けられているのは、建物入り口からもっとも奥にあたり、上段の間のすぐ裏手にあたるという位置関係で理解できる。この後、下段の間に入って江戸の方角（東）を仰ぎ、將軍（公方様）と父柳沢吉保（保山公）への拝礼をおこなった。そして、国許への到着をすぐさま幕府と身内に知らせるため家臣にそれぞれ役を命じ、衣服などの褒美をあたえたとある。

この一連の祝儀ののち、あらためて吉里は上段の間に移動して家臣たちと熨斗を祝ったとあるので、藩主はつねに上段の間にばかり着座するとはかぎらず、その儀式的目的によって着座の位置に違いみられ、室内の空間の使い方がいくつかわかり興味深い。このあとの部分は、国許の家臣たちとの祝いの儀式をとりおこなったことが記録されているということだろう。藩主吉里は上段の間に、家臣たちは下段の間に着座している様子、また序列に従って順に祝儀を述べる様子が記されてる。このあと、吉里は楽屋曲輪をでて、ようやく居館である屋形曲輪に入った。しかし、ここでも「居間」において着座して熨斗を祝っているということは、奥にいる国許の夫人やそこに仕える人々と屋形曲輪御殿でもつづけて祝いの式が行われたということであり、雑煮、酒三献と献立が記されているのも面白い。

なお、初入国にあたり、これに続いて4日後の5月9日条には、藩主吉里の城内見分の記事がみられる（表3-⑦）。甲府城内を見分して歩いたルートが記されているが、「麻上下」つまり麻袴で「梅林門を出て」とあることから、おそらく屋形曲輪御殿をでて梅林門をとおり、稲荷曲輪へむかったということだろう。稲荷曲輪の稲荷社（城内の鎮守社）へ参拝に行き、そのまま本丸の毘沙門堂（柳沢氏により建立。持仏堂か。）へ参拝し、のちに楽屋曲輪移動して家臣たちと祝いの式をしたとあるので、これも儀式的要素をたぶんに含む重要な行為だったのであろう。その後ふたたび城内を歩き回ったとあるので、儀式の後には自由にみてまわったということかもしれない。なお、在国中はこの2か所を毎月参拝していたとある。城内を見分したのは、日をあらためて、城内武家屋敷の様子を見分（表2-⑧）、城下の外から堀の様子（表2-⑨）を見分したという様子も記されるので、城主初入国の際は内城から順に武家屋敷、城下へと順を追って見分していたことがわかる。

また、数か月後の10月23日、吉里の初入国を祝って城内で能が興行された（表2-⑩）。興味深いのは、藩主である吉里自らが城内楽屋曲輪能舞台で舞い、国中からまねかれた人々、そして道行く人にまで見物させたことである。江戸城では「町入能」といって、將軍宣下の時などに城下の町屋の人々が招待され、將軍とともに能を楽しむ機会があった。この日は無礼講とされ、土産もでたという。町屋の人々は御殿と能舞台の間、つまり白洲の部分から能を自由に楽しんだ。吉里によるこの能の興行は、この町入能をまねたものかもしれない。

能は武家社会においては教養として重視され、江戸時代には幕府の式楽としてととのえられ整備されていった。徳川将軍は歴代能を愛好したため、江戸城においては毎年定められた日におこなわれる御謡初などのほか、頻繁に能が催されている。柳沢家でも折にふれ能を催していることは「福寿堂年録」からもうかがえる（表2-④、表2-⑩参照）。

近世武家社会における能舞台の頂点は江戸城内の能舞台ということになるが、江戸城には複数の能舞台があった。江戸城では、最も格式の高い儀礼空間である本丸御殿「大広間」の正面に位置する表能舞台のほか、中奥などにも能舞台が設えられていた。諸大名もこれにならい、みずからの江戸の屋敷や居城に能舞台を設えていたため、柳沢家でも居城である甲府城の能舞台以外にも、江戸の屋敷にも能舞台があった。大名の中には、加賀前田家のように居城のなかに複数の能舞台をもつ大名もいた。

ところで、これまで甲府城楽屋御殿の能舞台については「楽只堂年録」などの絵図によりその存在はしられていたものの、残されているのは平面図のみで細部については不明であった。しかしながら、近年あらたに確認された能舞台関連史料から得た情報を補完すると、屋根の形状は入母屋づくりであり、その屋根は銅瓦が使用されたことがわかってきた（図4-②参照）。

能舞台は江戸時代にはすでに規格が定まっており、とくに「本舞台」とよばれる舞台そのものの大きさは三間四面となっている。ここに、演者の登場スペースなどに使用される「橋がかり」が接続し、その先に舞台裏として「鏡の間」、また「装束の間」や「楽屋」が附属して構成されている。能舞台は、「面（おもて）」をつけた演者が演じるため、舞台の大きさや橋掛りの長さなどは一定の形式に定められ、あまり自由につくることはないが、舞台の屋根の意匠などは選択の余地のある部分で、入母屋、寄棟、切妻など様々な形状がみられ、屋根材も藁、茅、瓦、銅葺きなど様々な違いがみられる。当然上を重んじる武家社会では、江戸幕府の能舞台をうわまわるような装飾は遠慮したと推測されるが、甲府城の能舞台は入母屋づくりで銅瓦葺きというたいへん立派なつくりであった。

新しい藩主が国入りに際し、国中の人々を招いて祝いの式をとりおこない、能を自ら舞う……。この吉里による演能行事は、甲斐国の人々にとって、新しい時代の幕開けの象徴的な出来事として記憶されたに違いない。ここに、柳沢家の文化的なレベルの高さや藩主吉里の教養の深さを知らしめる重要な舞台装置として、能舞台が象徴的に機能した様子を垣間見ることができるのである。

柳沢家が甲府城を去ること3年後、享保12年の冬、甲府城下でおこった火災は城内にも燃え広がり、屋形曲輪の御殿など多くの建物はまたたくまに灰燼と化した。すでに城主がいない城となった勤番支配という体制下では、以前のように藩主の居館は必要でなく、屋形曲輪御殿はもとのすがたに復されることはなかった。また、楽屋曲輪御殿は類焼をまぬがれたものの、老朽化ののちにはごく一部をのこして解体されることとなった。しかしながら、楽屋曲輪の能舞台だけは江戸の田安德川家へ移設されることとなった（表2-⑪⑫）。

甲府城の能舞台が移設されたことは、この建物が非常に優れたものであったことをまず裏付ける出来事といえよう。また、移設先が田安家であることから、甲府城と徳川家の深

いつながりを示すひとつの歴史として興味深い。さらには、田安家がこの能舞台の移設を大切な家の歴史のひとつとして丁寧に記録し今に伝わることから、田安家にとっても能舞台をしつらえることは一大行事であったこと、且つそのために甲府城の能舞台が大切に移築され使用されたことが確認できるのである（図4—③参照）。

城郭は城主の威厳を示す舞台装置である。そして、本稿であつかった御殿群は、城が大名の居城として機能するために設けられた儀礼の中心的施設である。能舞台は、そのなかでもとりわけシンボリックな存在として位置付けられよう。甲府城の御殿と能舞台は、柳沢氏が自らの居城として甲府城をととのえ完成させた象徴的な施設なのである。

おわりに

これまで、甲府城の建物についてふれられた論考は意外にすくない。これは、甲府城に関する史料の多くは散逸しているからである。しかし、絵図や文献史料の断片的な情報をひろっていくと、今は城跡となっている甲府城跡にかつて人々のいきいきとした生活があったことを感じることができ大変興味深い。

「楽屋」とは、雅楽では楽人の演奏する所、あるいは、舞人が装束を着用する所をさすという。新藩主登場の象徴的な舞台装置となった能舞台。楽屋曲輪とはまさに能舞台のある曲輪という意味であたえられた美称であろう。楽屋曲輪という名称には、実はわれわれの想像をうわまわる深い意味や願いが込められているのかもしれない。

能舞台は、儀礼の場を構成する空間のひとつとして、見所である御殿建築とあわせて評価するべきであろう。また、甲府城の能舞台を的確に評価するには、同じく柳沢家の江戸屋敷にある能舞台をはじめ、全国の城郭の能舞台との比較も必要である。それについては、後日としたいと思う。

引用文献・参考文献

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第222集『県指定史跡甲府城跡（下巻）』2005 山梨県

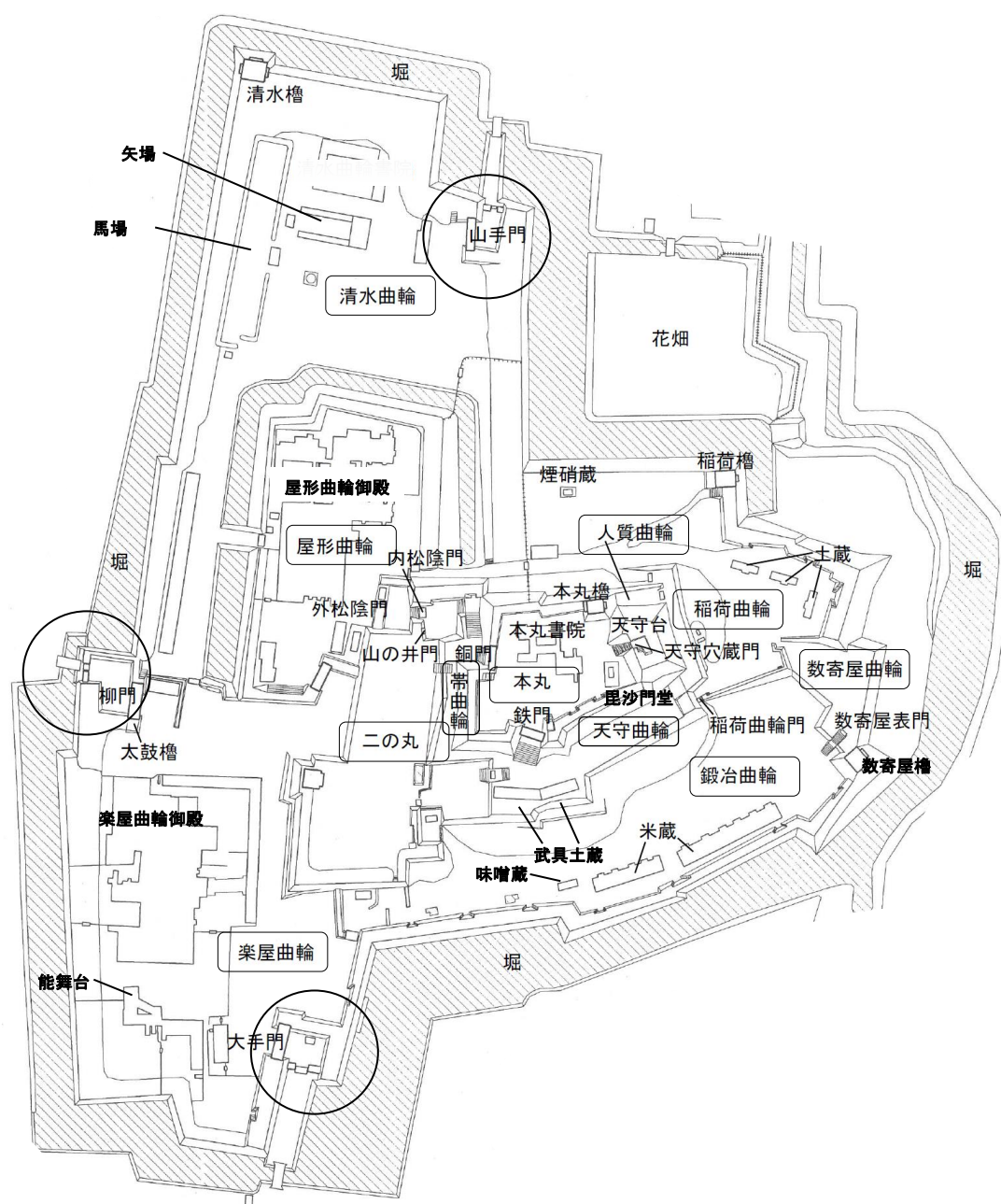
同センター調査報告書第223集『県指定史跡甲府城跡 平成16年度石垣改修工事調査報告書』2005 山梨県

同センター調査報告書第294集『県指定史跡甲府城跡 鉄門復元整備事業報告書（上巻）—甲府城跡櫓門整備事業に伴う調査及び関連事業工事等の報告—』2013 山梨県教育委員会

小粥祐子氏・平井聖氏共著『よみがえる江戸城』2014NHK出版

渡辺洋子氏著「甲府城—近世甲斐国の中心地」『定本山梨県の城』1991 郷土出版社 ほか

■図1 絵図をもとに読み解く甲府城の姿（柳沢期）



■表 1 甲府城内のおもな曲輪と諸施設の配置状況（柳沢期）

曲輪名	おもな施設
本丸	櫓 1 棟、書院、毘沙門堂
天守曲輪	武具土蔵 2 棟
二ノ丸	櫓 1 棟
稻荷曲輪	櫓 1 棟、土蔵 3 棟、焰硝蔵 1 棟、稻荷社
数寄屋曲輪	櫓 1 棟
鍛冶曲輪	米蔵 2 棟、味噌蔵 1 棟
屋形曲輪	御殿（藩主居館）、金蔵 1 棟
清水曲輪	櫓 1 棟、馬場、矢場
楽屋曲輪	御殿（政庁）、能舞台

■表2 城内建物に関する諸史料

	年月日	西暦	記 事
①	宝永2年9月 26日	1705	『楽只堂年録』第173巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 甲府城能内外所々の名を改む 或ハ元の名を用ひ或ハ新構ふ名つくるもあり 一 鉄門元ハ南門 銅門元ハ西門 天守曲輪門元ハ稻荷曲輪四足門 天守曲輪元ハ東帯曲輪 中之門元ハ武具蔵前矢来門 帯曲輪門新規 松陰之門元ハ長番所前門 屋形曲輪門元ハ埋門 梅林門元ハ長番所後四足門 中之門元ハ水之手江出口四足門 清水曲輪新規 竹林門新規 稻荷曲輪門元ハ鍛冶曲輪出口四足門 数寄屋曲輪元ハ隠居曲輪 数寄屋門勝手門元ハ隠居曲輪入口四足門 数寄屋門元ハ隠居西門 鍛冶曲輪門元ハ蔵前四足門 台所門新規 坂下門元ハ台所前四足門 楽屋曲輪新規 大広間門新規 長屋門新規 追手門元ハ南追手 柳門元ハ西追手 山之手門元ハ水之手門 花畑新規 追手曲輪新規、北ハ厩平岡宇右衛門・柳沢隼人・近藤図書、南ハ鈴木主水・飯塚彦右衛門屋敷迄 柳曲輪新規、南ハ外蔵より柳沢権大夫、北ハ山本十郎左衛門屋敷迄 山之手曲輪新規、東ハ藪田五郎右衛門、西ハ青木藤兵衛、北ハ千葉七郎右衛門屋敷迄 穴切口見付門元ハ百石町口 横沢口見付門 青沼口見付門 下横沢口見付門 元三日町口見付門元ハ古三日町口見付門と云、今元二改む 立町口見付門 元連雀町口見付門 元城屋町口見付門上之ニヶ所を元と改む 愛宕町口見付門以上之ハヶ所ハ新規 一 只今迄古府中と申候事相止府中と斗 一 古城と申事相止、元御館跡と 一 町々古と申事相止、元何町と 一 山田町元ハ伊勢町、緑町元ハ川尻町・・・・（略）
②	宝永2年11月 18日	1705	『楽只堂年録』真名本第175巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 屋形曲輪西之方有来門取除之、石垣仕、冠木門二建直シ申度候、 一 稻荷曲輪より清水曲輪江出候矢来門取除之、石垣仕、冠木門建申度候、 一 楽屋曲輪東之方石垣有来門高サ六尺有之候、此上二三尺程高ク石垣築足シ申度候、 一 花畑屋敷北之方長サ三拾四間幅五間新規二堀附ケ申度候、 一 追手門輪・山ノ手門前二ヶ所喰違石垣堀共二取払申度候、 一 稻荷曲輪二ヶ所石垣孕申候、築直シ申度候、 一 山ノ手門際堀浚申度候、 一 追手曲輪・柳曲輪堀埋リ土手崩申候、堀土手浚手石垣築直シ申度候、 一 追手門曲輪之通柳曲輪二八ヶ所見付門仕度候、 一 東北外曲輪土手崩申候、堀浚土手築直シ申度候、 右朱引書付之通修復仕度奉願候、以上 宝永二乙酉年 十一月十八日 松平美濃守 在判 ※175巻所収絵図「甲斐国府中城曲輪絵図」に書き込まれた文言と同文である。
③	宝永3年6月 23日	1706	『楽只堂年録』真名本第186巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） （前略） 甲州居館今日柱建

④	宝永3年8月2日	1706	『楽只堂年録』真名本第188巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） （前略） 由甲州城内産靈芝興行能祝之
⑤	宝永3年9月28日	1706	『楽只堂年録』仮名本第190巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 甲州の屋形今日上棟なるによりて能を興行して祝ふ 一 上棟の札の文言爰に記す・・・・（略）
⑥	宝永7年5月5日	1710	『福寿堂年録』第12巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 今日午の刻、国許に到着す、楽屋曲輪玄関より家臣柳沢権太夫保格案内にて休息の間へ入る、暫ありて麻上下を着して下段の西の方へ着座し、江戸の方へ向ひて 公方様へ御礼を申上く、次に 保山公へ御礼を申上く、やがて江戸への使者を申付く、公儀への使者は家臣柳沢権太夫保格 保山公母堂ならびに一類中への使者、平野源左衛門高恒なり、是によりて権太夫保格へ時服三つ、源左衛門高恒へ麻上下三具を与ふ、それより上段に着座す、権太夫保格のしを捧ぐ、下段へ家老共一同に出て祝儀を述ふ、何も熨斗を与ふ、家老とも下段左の方に着座す、次に城代・大寄合・中老・寄合・番頭出て祝儀を述ふ、畢りて屋形曲輪へ入る、居間に着座してのし引渡、雑煮酒三献を祝ふ
⑦	宝永7年5月9日	1710	『福寿堂年録』第12巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 辰着上刻麻上下を着して城中を見分す、梅林門を出て稻荷大明神を拝し是より後在国の中は毎月拝す、本丸へ上りて毘沙門を拝す是より後在国の中は毎月拝す、畢りて楽屋曲輪へ入りて熨斗を祝ふ、家老・城代へのしを与ふ、それより所々を廻りて見る、
⑧	宝永7年5月19日	1710	『福寿堂年録』第12巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 曲輪内の侍小路を見分す
⑨	宝永7年6月23日	1710	『福寿堂年録』第13巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 一 城外の堀廻りを見分す
⑩	宝永7年10月23日	1710	『福寿堂年録』第18巻（公益財団法人柳沢文庫蔵） 十月 一 今度入部せし祝儀とて楽屋郭にてさる廿一日より廿三日廿四日廿六日今日まで能を奏てさせ、自身にも舞ひて家中の諸士ならびに国中の寺社・町中・道中の者まてに見物させたり、
⑪	寛保2年力	1742	『甲府勤番日記』（江戸東京博物館蔵） 一 御城内御舞台御取崩、十二月迄二済
⑫	寛保3年正月力	1743	『甲府勤番日記』（江戸東京博物館蔵） 一 同廿九日より御城内御舞台取崩、材木江戸江舟廻シ被仰付、遠光寺村迄持出ス

⑬	宝暦2年成立	1752	『裏見寒話』 ○御城内御曲輪御門々の名目 (前略) 楽屋曲輪御玄関勤有、附鎗の間、中の間 外御殿先年、御取崩に成る 御 舞台銅瓦田安御殿へ引せらる 下楽屋御取崩 屋形曲輪御屋形焼失 稲荷曲輪御武具蔵あり 数寄屋曲輪古来より御家作なし 鍛冶曲輪御 米蔵 清水曲輪御屋形焼失 帯曲輪 御本丸焼失 二の丸御家作 無之 柳曲輪御家作無之 追加に云、楽屋曲輪中張附襖、格天井釘隠し、棟、取替花菱、柳 沢家の定紋、上段の間、明り床の彫物、凡て花菱、畳は備後表廿 五畳敷、襖杉戸の引手も都て花菱 杉戸の絵は皆深信の筆なり、
---	--------	------	--

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第222集『県指定史跡甲府城跡』下巻(2005年、山梨県)、同センター調査報告書第223集『県指定史跡甲府城跡 平成16年度石垣改修工事調査報告書』(2005年、山梨県)より引用の上、一部加筆

■図2 屋形曲輪御殿平面図



「楽只堂年録」第173巻所収甲府城絵図
(公益財団法人柳沢文庫蔵)

①上ノマ②次③三ノ間④ユドノ⑤上リハ⑥タイスノマ⑦溜リ⑧牡丹ノマ⑨竹ノ間⑩納戸⑪料理ノマ⑫台所⑬膳立⑭トマ⑮油部ヤ⑯用部屋⑰キヤク座敷⑱諸物頭番所⑲右筆部ヤ⑳番所㉑坊主部ヤ㉒中ノロ㉓役人詰所㉔寝所㉕居マ㉖次㉗三ノ間㉘化粧ノマ㉙ユドノ㉚上リバ㉛拝所㉜タイスノマ㉝広敷㉞モノヌイ所㉟長局㊱スエ㊲ユドノ㊳詰所㊴ドマ (※絵図内の文字の翻刻にあたっては、一部常用漢字に改めた。)

■図3 楽屋曲輪御殿平面図

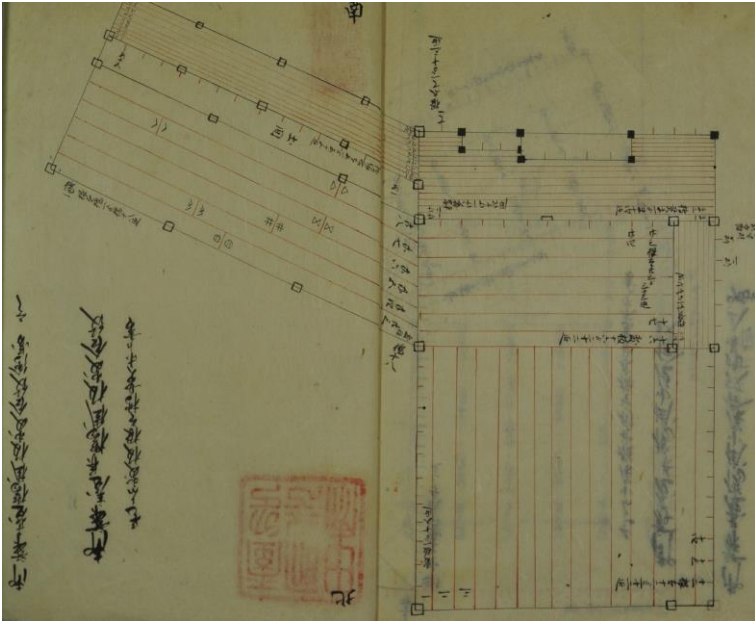


「楽只堂年録」第173巻所収甲府城絵図

(公益財団法人柳沢文庫蔵)

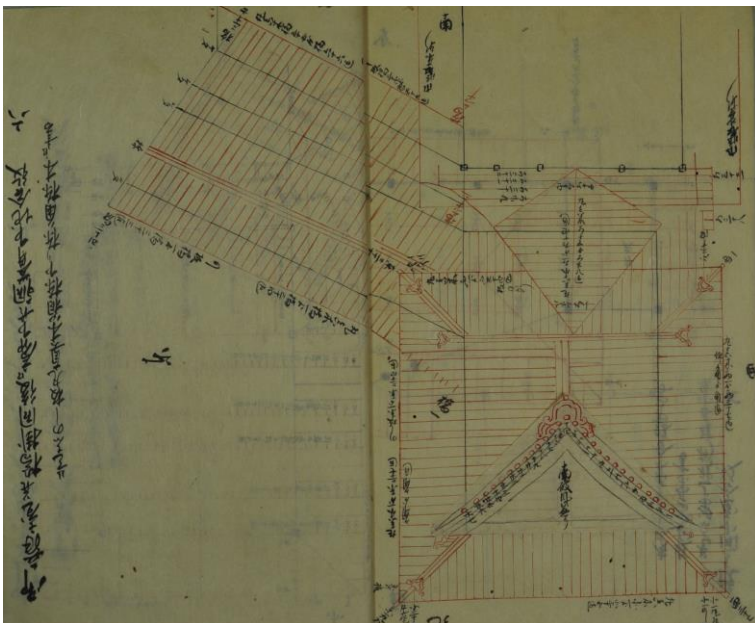
①上段②下段③納戸構④一ノ間⑤次⑥休息⑦次⑧三ノ間⑨牡丹間⑩竹ノ間⑪タイス部ヤ⑫納戸⑬右筆部ヤ⑭歩行番所⑮物頭詰所⑯上台所⑰下台所⑱煮焼ノマ⑲料理ノ間⑳膳立㉑サカ部ヤ㉒アラ物部ヤ㉓ワン部ヤ㉔油部屋㉕青物部ヤ㉖干物部ヤ㉗ボウス部ヤ㉘ショクタイ部ヤ㉙舞タイ㉚ハシカトリ㉛鏡ノマ㉜装束ノ間㉝上ガクヤ㉞シモガクヤ (※絵図内の文字の翻刻にあたっては、一部常用漢字に改めた。)

■ 図4 楽屋曲輪能舞台絵図(移設時に作成された記録から)



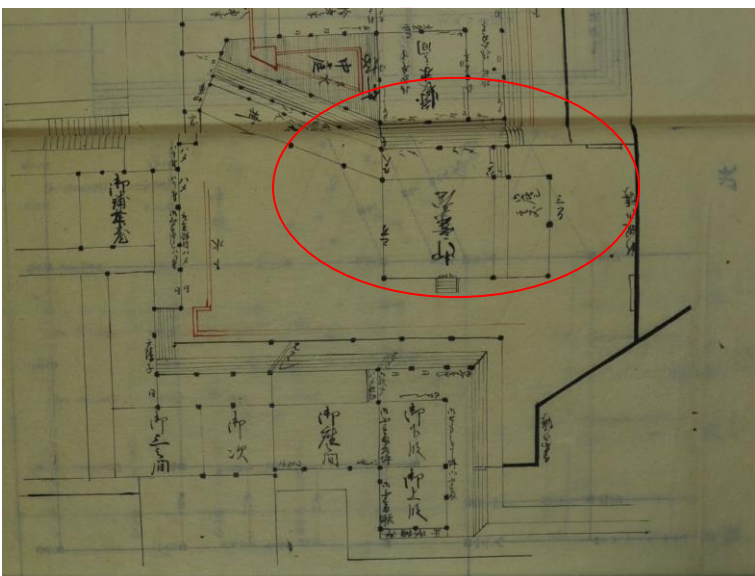
舞台平面図。移設の際は、部材に△や井など合印がほどこされたことがわかる。

①「田藩礼儀典」第2冊(国文学研究資料館蔵)



能舞台屋根の図面。屋根の形状がわかる。

②「田藩礼儀典」第2冊(国文学研究資料館蔵)



田安家御殿のなかに移設された旧甲府城能舞台。

③「田藩礼儀典」第2冊(国文学研究資料館蔵)

富士山の環境とその変化

環境省富士五湖国立公園管理官 仁田晃司(にったこうじ)

山梨県は富士山をはじめ、南アルプス、八ヶ岳など山々に囲まれた山岳環境豊かな場所です。しかし、これらの山々の生い立ちは様々で、特に富士山と南アルプスは 50km ほどしか離れていないにも関わらず成り立ちや環境が違ふと共に変化も違います。

今日はこれらの山々が形成されはじめた古代から現代、そして富士山の変化について話します。

1. 成り立ち

- 富士山は活火山、1万年前から活動が始まり現在の形になったのは 2,200 年前頃

- 富士山は活火山、**1万年前**から活動が始まり...

■成層火山の断面概念図

富士山はやわらかいスコリア(火砕物)と硬い溶岩が層を作り曲線美を形成しています



富士山科学研究所「日本の火山 富士山」より



吉田ルート下山道八合目付近から清走方向を望む



富士山の輪郭は美しい曲線を描いている

現在の形になったのは2,200年前頃

- 山頂火口から吹き上げられたマグマ(溶岩)は1000m以上吹き上げられ熱いまま落ちてきます。遠くまで飛ぶ性質ではないので火口に近い7~8合目に限られ急斜面を形成しました。



- 南アルプスは構造山地、100 万年前からプレートのぶつかり合いによって隆起

- 南アルプスは構造山地、**100万年前**からプレートのぶつかり合い(多重衝突)によって隆起



富士山科学研究所「日本の火山 富士山」より

2. 山として

- 富士山は日本一の高さを誇る独立峰 3,776m
- 南アルプスは北岳 3,193m を頭に 3,000 峰を 13 座有する山脈

3. 甲府周辺からの見え方

- 富士山 “山梨から意外と見えない” (新聞記事引用)
- 南アルプス 甲府盆地からは北端の甲斐駒ヶ岳から中央の赤石岳まで

富士山 山梨は意外と見えない?



山梨県内では、富士山周辺や甲府盆地北部などで眺望を楽しめるが、甲府盆地南部、富士川沿いや大月方面からは望めず、関東一円に比べると限定的

眺望可能エリア公開 近すぎ、山の多さネック

2018.9.9 山梨日日より

- 富士山は日本一の高さを誇る独立峰3,776m



4. 特徴

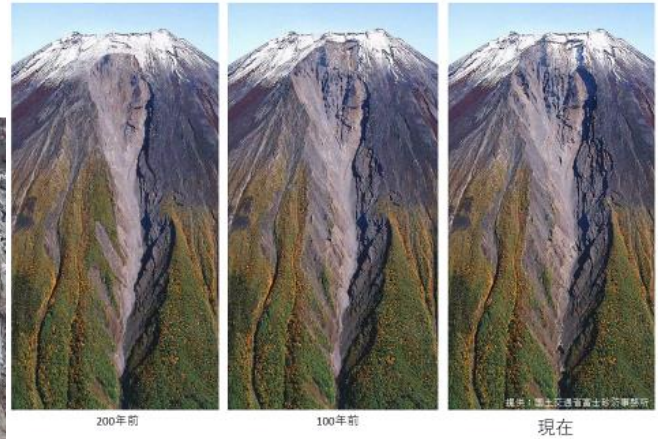
富士山

- ・山が形成されてからの時間が短く、活火山でもあり固有種は生息・生育しない
- ・標高が高いことから永久凍土が存在する(他に、大雪山と北アルプス)
- ・火山であり山体が脆弱で多くの谷筋が存在し、既に 1000 年前から大沢崩れは始まっていた

- ・標高が高いことから永久凍土が存在する
(他に、大雪山と北アルプス)



最大の崩壊地・大沢崩れ



南アルプス

- ・降雨量が多く降雪量が少ない気象条件と、急速に隆起した地形が織りなす深い谷や崩壊地
- ・山の形成が古く固有種が多く氷河期の遺存種も生息・生育する
- ・南限(氷河の痕跡、ライチョウ、ハイマツ)
- ・現在も世界トップクラス(年3mm 以上)の隆起速度で動いている

南アルプス

- ・降雨量が多く降雪量が少ない気象条件と、急速に隆起した地形が織りなす深い谷や崩壊地
- ・現在も世界トップクラス(年3mm以上)の隆起速度で動いている
(間ノ岳の標高変更2014は測量技術の精度向上や、近年の地殻変動の影響)



- ・山の形成が古く固有種が多く氷河期の遺存種も生息・生育する
- ・南限(氷河の痕跡、ライチョウ、ハイマツ)



氷河期によって北の寒い地方から
日本に入ってきた



周北極植物と固有種

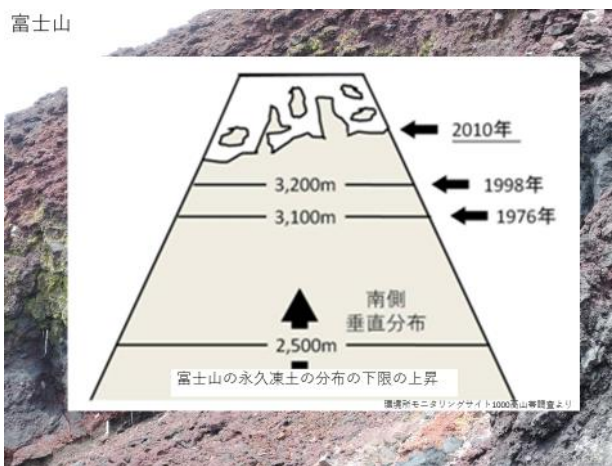


5. 変化

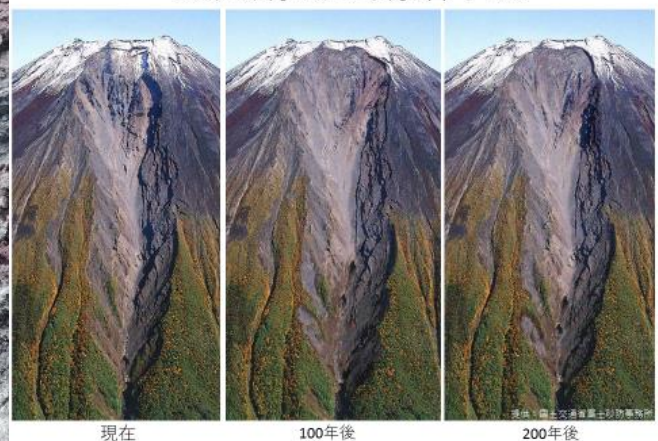
富士山

- ・2つの上昇「永久凍土の下限」「種子植物の生育」
- ・崩れゆく山「八百八沢」

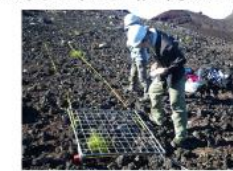
富士山



大沢崩れの崩落予測



山頂で種子植物が生育



富士山頂のコケ群落に侵入したコタヌキラン

高山帯に生育する植物が上部高山帯にも生育するようになった。これは国内外来種なのか国内種なのか。学界でも結論が出ていない



オンタデ



フノハタザオ



イワノガリヤス

環境省モニタリングサイト1000 富士山等調査より



山頂火口の崩壊



南アルプス

- ・ニホンジカの侵入により高山植物のお花畑が次々と無くなっている

1979年



植物も土もない

2009年



塩見岳(東面)山頂直下
3,000mの稜線に広がるお花畑が
ニホンジカに食べられてしまいました

6. まとめ

富士山は今後どの様に変化するのでしょうか？

曲線美の基となる硬い溶岩やスコリヤの崩落が進み、大沢崩れは山頂から崩れ始める、それ以外の沢でも崩落が進み数百年後には形が変わっていき、種子植物の侵入が加速して緑の富士山に…森林限界が五合目から上昇していくかも…これらの変化は温暖化の影響かと思います。

これらの気象変化と共に影響を受ける高山帯の様子を見守っていきましょう。

山梨県立大学観光講座:「野外観察会」

平成30年10月28日(日曜日)



午前9時に飯田キャンパスを出発

- 1 : 宮沢賢治銀河鉄道展望台（韮崎市穂坂）・・・・・・ 御勅使川扇状地を背景に
- 2 : 明野ヒマワリ公園・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 南アルプス十八ヶ岳の形成史
- 3 : 梅之木遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 縄文遺跡
- 4 : 道の駅「にらさき」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 昼食
- 5 : 韮崎市文化ホール・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮沢賢治の記念碑その他の観察
～～昇仙峡地域に移動（敷島経由：亀沢川ルート）～～
- 5 : 火砕流（黒富士火砕流）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 草鹿沢入り口カーブの分布
- 6 : 御嶽道（観察その1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 金桜神社の南側の郵便局付近
- 7 : 四万十帯の頁岩・粘板岩（板敷溪谷）・・・・・・・・・・ 板敷溪谷の南の駐車場
- 8 : 御嶽道（観察その2）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 羅漢寺山を臨みつつ
- 9 : その後は昇仙峡旧有料道路、長瀬橋、山宮、千塚経由で、車中から
（昇仙峡の御影石、山岳信仰、甲府盆地北部断層など）
- 10 : 県立大学に戻る、解散・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 午後4時30分頃

講師：輿水達司(自然分野担当)・新津 健(人文分野担当)

1：銀河鉄道展望公園

ヒマワリ公園から広域農道を南に向かって走ると、銀河鉄道展望公園が道路沿いの右手に見えます(写真1)。この展望公園から望む南アルプスの見晴らしも第一級です。七里岩も含めて手前側が相対的に低く、南アルプス山地との地形的なギャップを観察する上で理解し易い場所です(写真2)。

また、前方に見える南アルプスの左手の麓には、上流山地側から運搬されて堆積した規模の大きな御勅使川扇状地が、典型的な扇形を示す地形として観察できます。

さらに、この小さな公園が「銀河鉄道」と命名された背景には、中央本線が夜間に走る際、列車の帯が銀河鉄道のように見られる、という事以外に、韮崎生まれの保坂嘉内(かない)と宮沢賢治の親交についても後世に伝えよう、という事情も働いているようです。この点について、「銀河鉄道の夜」を執筆した宮沢賢治と保坂嘉内の関係等の詳細は、関係の資料を参考にしてください。



写真1 & 2：銀河鉄道展望公園付近



2： 明野ヒマワリ公園付近からの景色

明野町のヒマワリ公園付近は、茅ヶ岳の麓に位置し、北には八ヶ岳を、西には南アルプスを、南には富士山を望むことができる見晴らしの良いところです（図1）。これらの山ができる活動の原点は、地球表層部のプレートの衝突などの運動に求められます。日本列島周辺には4枚のプレートがひしめき合っています（図2）。

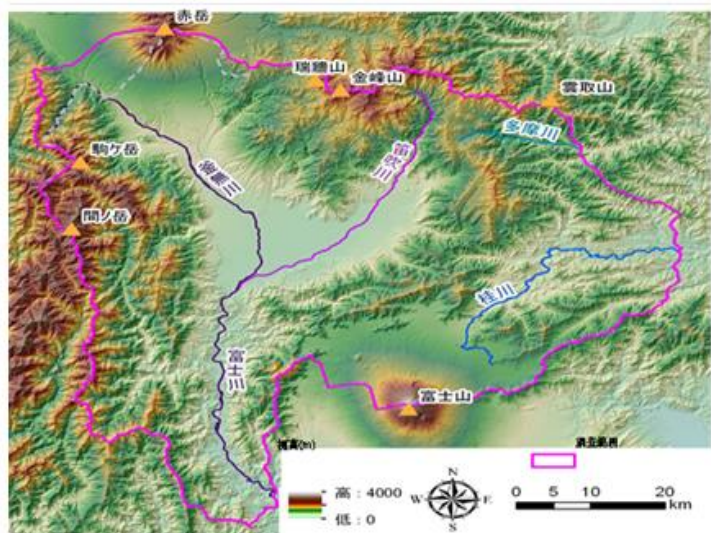


図1：甲府盆地と周辺山地

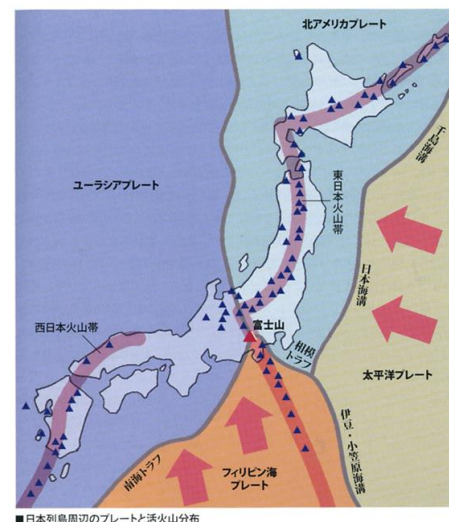


図2：日本列島周辺の4枚のプレート

地球上のプレートは大陸プレートと海洋プレートの2つに大別され、互いのプレートの境界は多くの場合に、海の中に認められます。陸上部を走っているプレート境界は、地球上を見渡しても極めて稀になります。例えば、ヒマラヤ付近であり、またニュージーランドという具合です。このように、陸上を走る珍しいプレート境界の一つが日本列島中央部にも存在しています（図3）上図の中で日本列島を横断しているプレート境界は、糸魚川—静岡構造線になります。このプレート境界が、北杜市をも通過しており、プレート境界を挟んで西側に南アルプスが、プレート境界の東側には八ヶ岳や茅ヶ岳が分布しています。地球上でもまれなプレート境界付近の手ごろな景観としてヒマワリ公園付近からの景色を挙げてみました（写真1）。手前の八ヶ岳の裾野（七里岩）と、その奥にそびえる南アルプスの山体の間に、プレート境界が走っています。



図3：地球上のプレートの位置



写真1：ヒマワリ公園付近からの八ヶ岳と南アルプス

3：昇仙峡の火砕流

そもそも、昇仙峡の地層・岩石について、その主体は一般には花崗岩（通称：御影石）とされているようです。ところが、実は昇仙峡地域には金桜神社の直ぐ北方に黒富士火山の噴火口が存在し、この黒富士火山の活動の主体は火砕流となり、昇仙峡地域には黒富士火山の活動によってもたらされた、火砕流の分布も多いわけです。火砕流という言葉について、特に身近になったのは、今から 20 年余り前に遡る、九州島原半島での雲仙普賢岳の活動（平成 6 年）において、マスコミ報道等によって一般に周知されました（下図）。

この火砕流現象の基本は、気体と固体粒子からなる密度流となります。一般の火山活動における、溶岩流などに認められる「液体」を、この火砕流の現象では含まないために、火砕流の移動の速度は極めて速くなり、時速 100km 程度のケースもあります。この高速流動のため、火砕流の活動時に逃げ遅れて人命を失うこともあり、実際に雲仙普賢岳の火砕流の流動（平成 6 年）においては、防災関係やマスコミ関係の方々の死亡も認められています。このような火砕流が昇仙峡に噴出口を持ち、今から 100 万年程前の昔に、甲府盆地の北部地域を中心に大規模に活動があったわけです。この黒富士火砕流の終末期には、黒富士火山の山頂部のほかに、燕岩や太刀岡山などに岩脈を呈する活動に転じています。

昇仙峡の火砕流の活動が 100 万年前ということは、富士山の活動の開始が 10 万年前ですから、富士火山の活動よりもはるか昔の出来事になります。そして、この黒富士火山よりも前の昇仙峡付近の火山活動としては、八ヶ岳火山の主要な活動ステージに対応する、甲府市山宮北方の片山溶岩となるわけです。



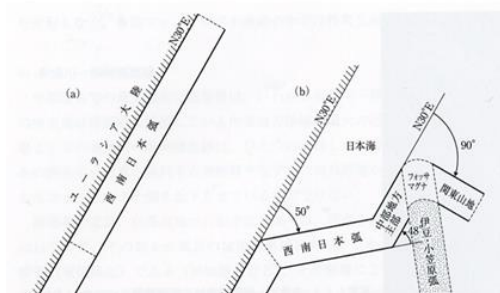
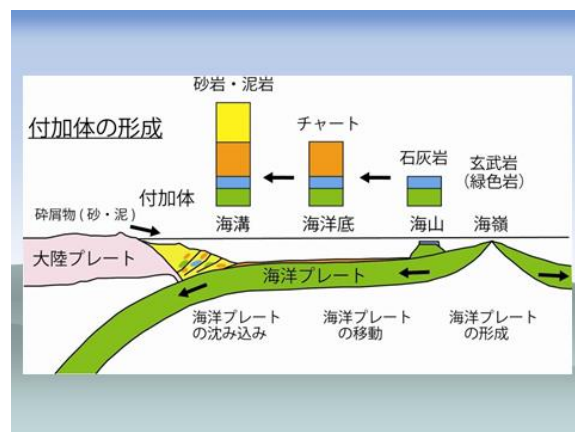
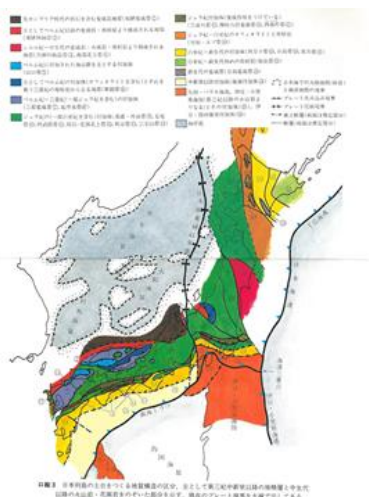
雲仙岳の火砕流（平成6年6月24日）

4：昇仙峡の粘板岩から確認できる日本列島の屈曲構造

日本列島の大地の形成を歴史科学的に要約すると、下図の上段左図のように帯状でしかも日本海側から太平洋側に向かって順次若くなっています。この現象は、まず基本として南（南東）方向から日本列島に向かうプレート運動によって、現在の南海トラフの様な凹み部分に大陸側のみならず、南の海からの贈り物が運搬され溜まり（下図の上段右図）、その後この帯状の堆積物が上昇して陸になります。この一連の活動に続いて、さらに、その南の凹みに同様にモノが溜まり、というように日本列島が順次南側に、堆積物の帯がくっついて陸域化する仕組みで、成長（大陸成長）してきた経緯が理解できます。現在の南海トラフの凹みは将来には陸になる、というわけです。

ところで、今から 1500 万年前頃の昔には、それ以前にはユーラシア大陸と一体であった日本列島が、ユーラシア大陸から離れ日本海が誕生し、さらに南（南東）側から伊豆・小笠原火山列島が本州に衝突するようになりました（下図の下段の図）。これによって、本州中央部は屈曲し、さらに南アルプスなどの上昇が開始しました。この地質学事件が、昇仙峡地域で確認できるのです。

本州中央部の屈曲状況を端的に示す地層としては、下図の上断左図の「ヤマブキ色」の四万十帯になり、具体的な山梨県内での地層分布は、早川雨畑地域の粘板岩（＝硯（すずり）の原石）であり、この延長が昇仙峡の野猿谷の粘板岩となります。さらに県の東側域での分布は勝沼や大月に、その東方では高尾山へと続いています。四万十帯の屈曲の最北部が、昇仙峡付近ということです。



日本列島の地質（上左図，平，1990），付加体形成の概念図（上右図），本州中央部屈曲の仕組み（下図，松田,2006）

5： 甲府盆地北部の断層系と温泉分布

甲府盆地は周辺山地を背景に一边が約 30km の三角形を呈している。これら山地には過去に活動した火山岩や火砕岩等が分布し、盆地と山地の境界付近において、盆地西側には概ね南北方向に走る糸魚川―静岡構造線系の断層が、また盆地南側には西南西―東北東方向に走る曾根丘陵断層が認められる。これに対し、甲府盆地の北側には西北西―東南東方向に直線状の地形的ギャップが認められるものの、断層の存在の指摘は最近までなかった。(図 1)。



図 1：糸魚川静岡構造線と曾根丘陵断層帯

ところが、近年の地下地質探査（ボーリング調査、放射能探査）から、甲府盆地北部域に断層の存在が考えられそうな状況になった。これにより、数年前に発掘調査もされた県庁の温泉遺跡を始め、甲府盆地北部に古くから知られている温泉が直線的に分布している事実（図 2）も踏まえ、地下に断層の存在する可能性が科学的に説明できる状況になってきた。この点の基本は、温泉の成因が断層に起因することであり、結局、甲府盆地には下図のように、従来から、その存在が指摘されてきた「活断層」に加えて、甲府盆地の北部にも、温泉の分布に沿って、盆地と山地の地形変換点付近に概ね直線的に走る断層の存在が確かになってきたわけです。

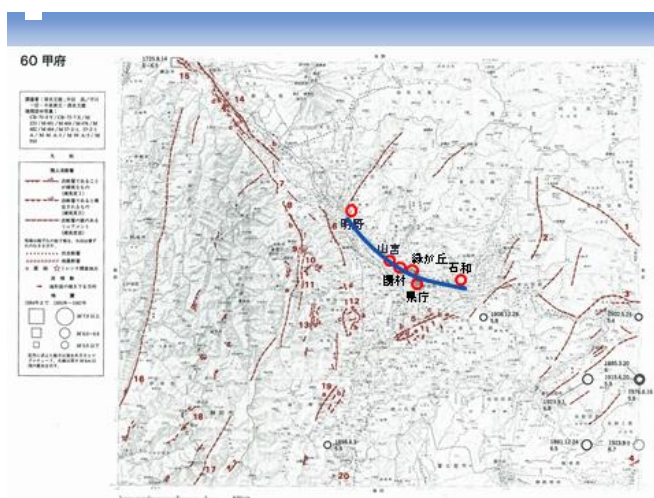


図 2：甲府盆地付近の従来から指摘された断層（日本の活断層, 1991）と甲府盆地北部断層系

1 国指定史跡 梅ノ木遺跡 (うめのきいせき)

梅ノ木遺跡：北杜市明野町浅尾字梅木、字浅尾原

国指定史跡：平成 26 年 3 月 18 日指定

遺跡の概要：縄文時代中期の中頃から末葉（5000 年～4500 年ほど前）の集落跡です。

発掘調査により、中央広場を囲むかのように約 150 棟の竪穴住居跡が直径 100 ｍほどの範囲で確認されたのです。さらに北側の斜面下の小川に至る道路跡も見つかりました。川岸にも敷石住居や集石遺構が確認され、水場や作業場として使われていたことが分かりました。特に縄文時代の道路跡は大変珍しいものです。

発掘された遺跡は埋め戻され、史跡公園として整備が進められています。市民参加で竪穴住居の復元も行なわれており、周囲にはクリやクルミの木などが植えられ、縄文時代の環境も整えられつつあります。



① 遺跡の表示



② 遺跡の様子：案内板



③ 復元された縄文住居

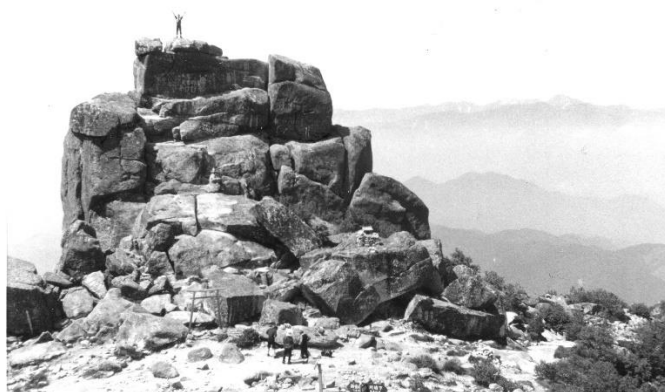


④ 谷への道路跡

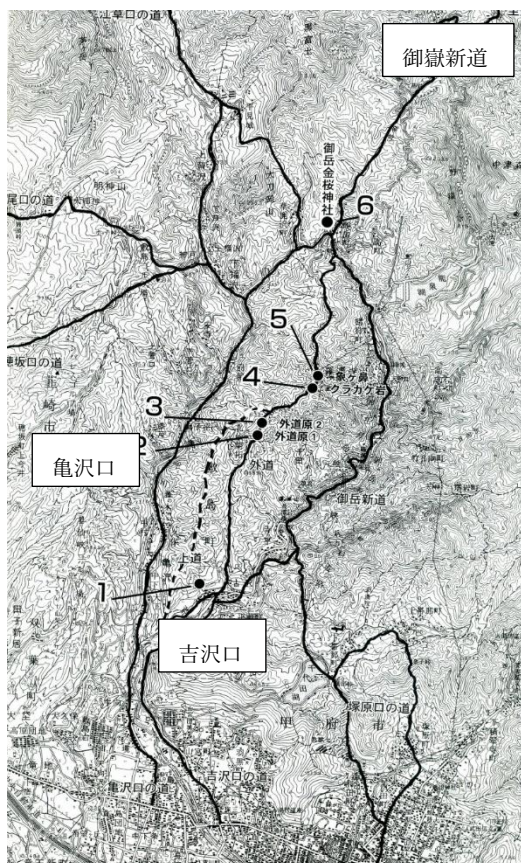
2 御嶽道と歌川広重

(1) 御嶽道とは

山岳信仰の拠点でもある金峰山に登る道のことです。同時に麓のムラの生活道路としても重要なルート。平安時代の修験道に伴って開かれたルートですが、江戸時代には山梨・長野を含めて九本以上の道が開設されていました。各ルートには里宮（金桜神社・金峰神社）があり、奥宮としての山頂を繋いでいたのです。天保12年には浮世絵師歌川広重が甲府緑町から吉沢口を登って金桜神社に至っており、その間のスケッチが残されています。



1 金峰山頂の五丈岩と牧丘金桜神社に残る蔵王権現像



2 御嶽金桜神社

吉沢ルート

○上道（じょうどう）

平安・鎌倉時代につくられた

○下道（外道）げどう

鎌倉・江戸時代につくられた

・亀沢ルート 鎌倉・江戸時代につくられた

・御嶽新道（みたけしんどう）

江戸時代後期（天保14年）開通

(2) 広重が歩いた御嶽道

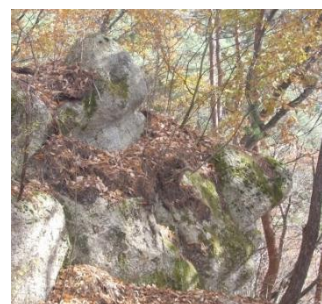
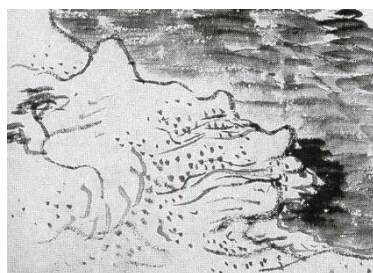
○金桜神社に近づくと「御嶽大門」という門があったと伝えられます。広重はこれを描いています。



御嶽大門の場所。ここまで来ると金桜神社の大きな鳥居が見えます。右写真は、大正時代の同じ場所。



○現在のパノラマ台に上る南斜面下に不思議な格好の岩があり、江戸時代には「象ヶ鼻」と呼ばれていました。広重はこれも描いています。



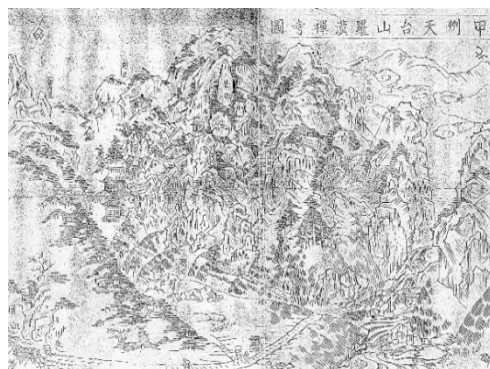
「象ヶ鼻」スケッチと現在の写真

3 羅漢寺山と天台山羅漢寺

羅漢寺山の花崗岩の岸壁には一〜三ノ嶽が祀られ、谷には羅漢寺本堂や屋敷が構えられていたことが発掘調査等によって確認されています。真言宗寺院として鎌倉時代に始まるとされるが、本尊阿弥陀如来には応永30年(1423)銘が残り、室町から江戸時代に栄えたことが理解できます。慶安4年大火で焼失。現在は曹洞宗寺院として場所を移しました。御嶽道が尾根筋を通過しており、かつては修験の場であったことが考えられるのです。



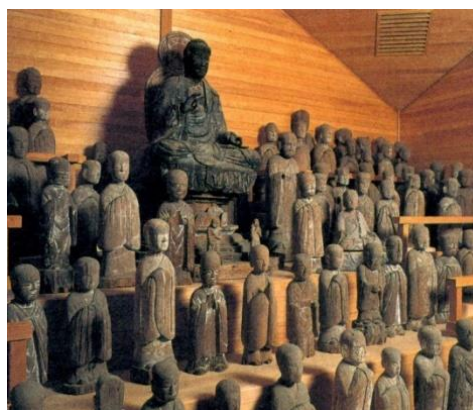
2 羅漢寺山



3 羅漢寺古絵図



3 発掘された旧羅漢寺の石垣



4 現羅漢寺の五百羅漢

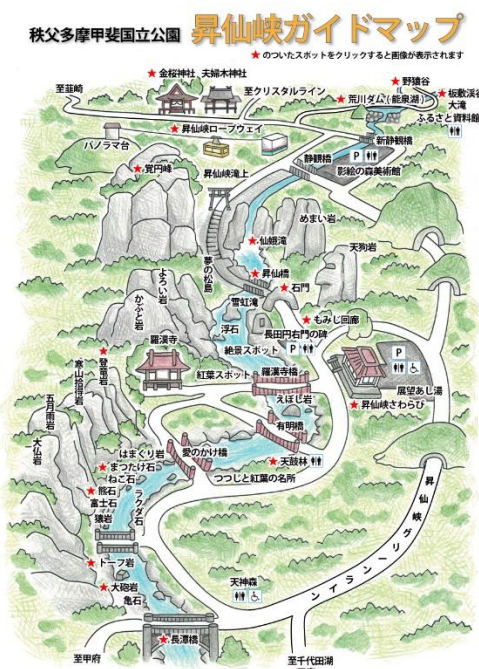
4 御嶽新道の開削

上道・外道（じょうどう・げどう）という御嶽道は尾根をまわる遠い道でしたが、江戸時代後期の天保年間、猪狩村の長田円右衛門さんが川沿いの便利な道を開削しました。これが御嶽新道です。現在の昇仙峡を通る道です。私費を費やし10年の歳月をかけて天保14年に開通しました。これにより付近の村人には大変役にたつと同時に御嶽昇仙峡の美しさが世に広まったのです。広重が御嶽道のあるいたのが天保12年ですので、すでにその頃は御嶽新道の開削も進んでいたことになるのです。



御岳新道古絵図

御嶽新道：江戸時代と現在



山梨県立大学 2018年度 観光講座
歴史科学的に山梨をひも解く

発行者 山梨県立大学 地域研究交流センター

山梨県甲府市飯田5丁目11-1

電話 055-225-5412 FAX 055-225-1150

E-mail ucrc-accept@yamanashi-ken.ac.jp

発行日 2019年（平成31年）3月31日

執筆者 岡村 道雄 保坂 康夫 興水 達司 小粥 隆弘 新津 健

中澤 京子 小澤 千寿子 西海 真紀 仁田 晃司

（順不同）

The University Center for Research and Exchange

